東北北部における
いわゆる蝦夷館の研究

課題番号　05301048

平成７年度

文部省科学研究費補助金（総合研究Ａ）
研究成果報告書

平成９年４月

研究代表者　工藤　雅樹
（福島大学・行政社会学部教授）

はじめに

本研究の成果を要約すれば次のようになる。

① 「蝦夷館」とは北東北に特徴的な、蝦夷が住んでいたという伝承のある古代の集落跡のことで、その多くは高地に立地し、埋まりきっていない竪穴住居跡がくぼみとなって観察できる。

② 平成６年度に発掘調査を実施した岩手県岩手郡西根町の子飼沢山遺跡は海抜 500メートルを越える高地の尾根上に存在する。大型と小型の竪穴住居各１基を発掘調査し、土師器、多量の鉄器、炭化した穀物粒などが出土した。遺跡の年代は土師器の形態から11世紀ころと考えられた。

③ 平成７年度に発掘調査を行なった岩手県岩手郡西根町の暮坪遺跡は海抜 430メートルの暮坪山の頂上一帯に広がる遺跡で、20個内外の竪穴住居跡がくぼみとなって観察できる。集落のまわりはけわしい斜面になっており、集落の主要部は山の斜面を人工的に切り落とし、その裾を濠状にした施設により二重に囲まれている。住居跡二基を発掘した結果、一辺が約六メートルほどの大形の住居と、一辺約三メートルほどの小形の住居の二つのタイプがあることが確認された。遺跡の年代は出土した土師器から考えて10世紀後半から11世紀前半ころのものである。

④ 平成６年度に発掘調査を実施した岩手県岩手郡岩手町の横田館遺跡は周囲に多重の土塁をめぐらす。発掘した２基の竪穴住居からは出土遺物はなかったが、集落全体や住居跡の構造から、常時居住した集落ではなく、13世紀以後の防御性の高い集落であろうとの結論を得た。

⑤ 「蝦夷館」の多くは平安時代後期のものと思われるが、蝦夷にかかわる伝承の有無にかかわりなく類似の構造のものを一般的に東北北部の平安時代高地性集落と呼称するならば、実地踏査の結果によれば、東北北部には学界に知られていない多くの平安時代高地性集落が存在する。

⑥ 東北北部の平安時代高地性集落は立地や構造などによりａ，平地との比高差数十メートル以上の高地に立地し、特に濠や土塁などを持たないもの、ｂ，丘陵の突端部に存在し、基部が濠で切断されているもの、ｃ，周囲に濠や土塁をめぐらすもの、などに大別される。また年代ではそしてこのような特徴を有する集落は、低地に立地し、濠や土塁を有しない一般の集落とはことなる、きわめて防御的色彩の濃い集落であると考えられる。

⑦ しかしながら東北北部の平安時代高地性集落についての研究は、今回はじめて年代や構造の一端が明らかにされた、学界では未知の種類に属する遺跡であり、今後もその実態を明らかにするための基礎的な研究が必要である。このような研究を推進するなかで形態的に類似するものがある北海道のチャシとの関係も明らかとなるであろうし、防御的色彩の濃い集落を生み出した古代蝦夷社会の性格にもせまることができるであろう。

研究組織

研究代表者：工藤　雅樹（福島大学・行政社会学部・教授）
研究分担者：甘粕　健　（新潟大学・人文学部・教授）
研究分担者：村越　潔　（弘前大学・教育学部・教授）
研究分担者：辻　　秀人（東北学院大学・文学部・助教授）
研究分担者：榎森　進　（東北学院大学・文学部・教授）
研究分担者：熊田　亮介（秋田大学・教育学部・教授）
研究分担者：樋口　知志（北海道教育大学・旭川校教育学部・助教授）

研究経費

平成５年度	１５００千円
平成６年度	２５００千円
平成７年度	１５００千円
計	５５００千円

月刊　考古学ジャーナル　4月号　平成7年4月
THE ARCHAEOLOGICAL JOURNAL　No. 387（通巻），April　1995

〝埴輪〟雑感

梅沢　重昭

昨秋，埼玉県で活躍されているK氏から1冊のノンフィクションものともいって良い著書をいただいた。すでに読まれた方もいて，考古資料のなかには事実が隠されたものがあり，特に研究上の基本条件である土地が誤って伝えられ，一人歩きし，それが真実として認識されてしまっているものがあるという，話題提供に複雑な想いを抱いた方もおられたのではないかと思う。私も，その一人であるが，とりわけ，K氏によって採り上げられた疑惑の資料が，私が考古学研究フィールドとしている群馬県地域にかかわるものであるだけに複雑な想いであった。

若干，内容にふれてみたい。埼玉県H市に戦後からみ，教材製作・販売のかたわら，考古資料，なかで埴輪類を蒐集し，その復元や修理を手掛け，商売もていた人がいた。T氏というその人の周辺には掘りといわれる人たちが出入りしていたが，そのうちの人が生前にT氏に隠していた発見時の経緯を打ち明ていた。T氏からそのことを聞くにつけ，真実性はすばかり，追跡調査を試みたが，疑惑はますます深り，その打ち明け話には間違いなく真実のものがあというのである。

その1つ，現在，東京国立博物館に収蔵されている土地が群馬県邑楽郡大泉町古海とされる〝椅子に腰ける女子像〟（重要文化財）は，本当は埼玉県児玉児玉町の生野山にあった古墳から掘り出されたものという。K氏は，その真偽を確かめるべく，群馬・玉を歩く。新聞社の記者も事実究明の取材活動が進られる。その結果として，生野山所在古墳からの発品であることは間違いないと結論しているのであ

K氏が問題提起しているように，あの埴輪女子像が生野山所在古墳の出土と結論づけてよいものなのか，私には結論づけるには，まだ手立てをつくす道が残されているようにも思う。重要文化財に指定されているものの胎土分析の難かしさはK氏も指摘しているが，非破壊的な方法ならどうなのか，科学的方法を駆使しての材質の検証は欠かせないし，それ以上に，オーソドックスな考古学的研究の本道にもどり，様式的検討も当然なされる必要があろう。私が現在，あの埴輪女子像に抱いている想いを述べれば，その出土地を確定する記録，伝承などは残ってはいないのだが，K氏の主張を肯定する気持にはなれないのである。機会を得てあの埴輪女子像を熟覧・観察しているが，胎土の質感や，造形上の特徴は群馬県地域の，それも東毛の利根川北縁寄り地域の埴輪事例に雰囲気の通じるものなのである。武蔵北部の生野山地域の埴輪人物像のなかに，あの埴輪女子像と同じ〝つくり〟の特徴をもつものが存在するということは寡聞にして知らない。だが，利根川を挟んだ上毛野と武蔵の間での埴輪工人の交流が存在していたとすれば，技術の移転，製品としての埴輪の供給は考えられないでもない。現に，前橋市中二子古墳の埴輪円筒類には，胎土の特徴から見て遠く離れた藤岡地域で生産されたものが供給されているようなのである。K氏の主張の通りの資料であるなら，埴輪生産機構やその供給圏を考える上で第一級の資料となり，埴輪研究に深化が期待される。

戦前に発見された埴輪類をはじめ考古資料のなかには，出土地の不明確なものは確かに多く存在する。埴輪を造形品として鑑賞の対象とするかぎりでは，真贋が明らかにされればよいかも知れない。だが，考古資料として研究の対象とするなら，それに加えて出土地の正確さは欠かせない。原点に立ちかえって埴輪類の出土地の正確を期す資料吟味の重要さを改めて想ったことである。

今月の目次

集・北日本の平安時代環濠集落・高地性集落
今月の言葉》〝埴輪〟雑感……梅沢重昭…1
北日本の平安時代環濠集落・高地性集落
……工藤雅樹…2
秋田県における平安時代の防禦集落
……高橋　学…4
岩手県における平安時代の防禦性集落について
……高橋與右衛門・室野秀文・本堂寿一…13
□青森県における古代末期の防禦性集落
……三浦圭介…20
□渡島半島南部の擦文時代の防禦集落
……久保　泰・森　広樹…27
〈追悼〉西村正衛先生を偲びて……櫻井清彦…34
〈追悼〉西村正衛先生を偲びて……芹沢長介…35
〈追悼〉西村正衛先生をしのぶ……江坂輝彌…35

北日本の平安時代環濠集落・高地性集落

工藤雅樹（くどう まさき）
（福島大学）

1．はじめに

考古学で高地性集落とか環濠集落といえば，西日本から東日本の一部に及ぶ地域に弥生時代を中心とする時期に出現するというのが常識であろう。この地域の弥生時代は常時戦いが起こり得る緊張した社会状況のもとにあった。そこで敵の攻撃から集落を守るために環濠や土塁，柵，櫓などを設ける防禦された集落，そして敵の攻撃を見張り，あるいは低地の親集落とは別個に，身を隠すために高地に営まれる逃込み集落が必要とされたのである。

しかし環濠集落や高地性集落が出現するのは，弥生時代の日本列島に限るものではない。中国の新石器時代には西安半坡遺跡や陝西省臨潼県姜塞遺跡のような環濠集落が出現し，やがて集落は堅固な城壁とその外側の濠を有するようになる。ヨーロッパにおいても，各地で新石器時代，青銅器時代からゲルマン，ケルト時代にいたるまでの各種の形態の防禦された集落の存在が知られている[1]。緊張した社会情勢のもとではいかなる地域，いかなる年代にも環濠集落や高地性集落が出現し得るのである。

1．研究史

東北地方に防禦された集落あるいは逃込みの集落が存在したことは実はすでに明治時代から知られていた[2～4]。現在それらのあるものはチャシ，館，蝦夷館などと呼ばれている。東北地方におけるこの種の遺跡が平安時代を前後する年代であることが明らかとなったのは大正末期から昭和の初期のころである[5]。

戦後になると東京大学東洋文化研究所による東北地方の「館址」の発掘調査が行なわれ，これに関連して種々の観点からこの種の遺跡に注意が向けられた[6,7]。また沼館愛三氏［1887～1950］も東北地方の城郭研究の立場から独自の研究成果を残した[8]。さらには各県において中世城郭の基礎資料の集成がはかられ，それらのなかでもこの種の遺跡が取りあげられている[9～12]。近年も本特集に名前を連ねた方々などがそれぞれ見解を示しておられる。

一方北海道においてはチャシについては河野常吉氏の先駆的な研究があり[13]資料の集成[14～16]や調査の結果をもふまえた問題点の整理も行われている[17]。

ただし東北地方のこの種の遺跡に対する関心は，地元在住の研究者でさえも決して高いとはいえないように思われる。それはひとつには遺跡の所在が山間部に偏しており，開発がらみの発掘調査の対象となることが少なく，これまでこの種の遺跡が発掘調査された例が少ないことにもよる。しかし近年少しずつではあるが，この種の遺跡の発掘調査例が見られるようになり，この種の遺跡の解明が北日本古代史の新たな展開に一定の寄与をもたらすであろうことが推測されるようになり，関心を寄せる人が増加しつつある。筆者もまた昨年，岩手県岩手郡岩手町横田館遺跡，同郡西根町子飼沢山遺跡[18]の小規模な学術調査を実施し，若干の新知見を得ることができた。

2．北日本平安時代環濠集落・高地性集落の類別

これまでに知られている東北北部のこの種の遺跡は若干のタイプに大別できるようなので，私案を示す。

第一のタイプは台地上の相当程度に大規模な集落の周囲に環濠，または環濠と土塁，柵列などをめぐらすものである（青森県浪岡町高屋敷館遺跡）が急峻な崖になっている部分には環濠を設けないものもある。このタイプは弥生時代の環濠集落とも対比できるものであろう。

第二のタイプは周囲の平地や湖水面などから急峻な崖でへだてられる比高差が数十m程度の高地に位置するもので，平地や湖水面などに突出する岬状地形の先端部に立地するものも多い。集落の主要部が濠で囲まれていたり（八戸市風張Ⅰ遺跡），岬状になっている部分の基部または先端部を除く三方が濠で断ち切られていたりする（鹿角市太田谷地館遺跡）。ただし濠の外側にも竪穴は広がっていることが多いようである。このタイプの集落の規模は概して小さい。高地性環濠集落とでもいうべきものであろう。

第三のタイプは海抜4～500m以上，低地との比高差も2～300mという山地に所在するものである（岩手県子飼沢山遺跡）。このタイプの遺跡は急峻な斜面，深い沢に囲まれており，遺跡からの眺望はよいものの，遠方からは容易に発見できないし，たどりつくことも簡単ではない。顕著な濠，土塁などはなく，集落の規模はきわめて小さい。ただし海抜高度がやや低いものもあり，それには濠あるいは土塁がともなうものもある。弥生時代ころの高地性集落に対比できるものであろう。このタイプの遺跡の調査例がもっとも少ない。

第四のタイプは平地との比高差は3～40m程度と比較的低いものの，急斜面上に多重の土塁をめぐらすなど堅固に守りを固めているもので，集落の面積は比較的大きいが，竪穴住居跡の数はあまり多くない（秋田県大鳥井山遺跡，岩手県横田館遺跡）。横田館遺跡では竪穴住居にはかまどがない上に，出土品もなく，長期にわたる生活の場とされたとは考えられず，竪穴住居の構造や土塁の様相などからすると，年代も第一から第三のタイプよりは新しく，あるいは中世に入るかもしれない。

なお上記の各タイプそれぞれの地域差，年代差，歴史性などについては，今後の課題としておく。

3．古代蝦夷の部族制社会と環濠集落・高地性集落

ここで平安時代の北日本に環濠集落や高地性集落が出現する意味について，私見を述べることにする。それは基本的には北日本の古代蝦夷の世界に社会的な緊張状況があり，敵の攻撃を受ける可能性が高いような情勢を背景として出現したものと考えられる。蝦夷社会にかかわる戦いといえば，第一に政府側と蝦夷側との戦いが想起されるから，蝦夷の世界の環濠集落や高地性集落のあるものが政府軍の侵攻に備えたものであった可能性は考慮しなければならない。しかしながら蝦夷の集団どうしもまた，戦いを交えることが稀ではなかったことも大いに考慮する必要がある。

筆者は蝦夷社会は，部族制社会の特質を備えていると考えている。部族社会では各部族間は特に同盟関係を結んでいない限り敵対関係にあると見なされ，利害関係によっては武力衝突に及ぶことも稀ではない。また部族内部においても枝部族どうしが武力抗争をくりひろげることもある。各部族は族長層の指揮によって行動するが，各部族の運命はしばしば武力衝突によって決定されたから，族長は武人的性格を帯びた。部族制社会の好例はゲルマン人，ケルト人社会に見ることができる（『ゲルマニア』『ガリア戦記』）。

蝦夷社会に族長層が出現する契機となったのは，七世紀ごろから東北北部にも稲作が復活し，生産力が高まったことと，同じく七世紀なかばに律令制への道をたどりはじめた政府が，それまで政府の直接支配の外にあった地域に対して関心を高め，城柵を設置し，蝦夷の地域に政治的，経済的，軍事的，文化的な影響力を行使しはじめたことである。政府側の勢力圏に入った各部族集団は政府側によって「村」と把握され（香河村，閉（幣伊）村，田夷村，秋田村，男勝村，伊治村，遠山村，斯波村，爾薩体村，都母村，邑良志閇村），村長が任命された（『類聚国史』巻190俘囚大同2年3月9日条，『日本後紀』弘仁4年2月25日条）。

東北北部から北海道の一部に及ぶいわゆる末期古墳は，部族集団の族長層の墓と考えられる。末期古墳の出土品に蕨手刀など刀剣類が多いこと（北上市五条丸・猫谷地古墳群，花巻市熊堂古墳群，宮古市長根Ⅰ遺跡，八戸市丹後平古墳群など），衝

角形冑のような武具があること（盛岡市上田蝦夷森古墳群）は，彼らが武人の性格を有していたことを，銙帯金具が出土することは彼らの中に位階を有するものがいたことを示す（宮城県栗駒町鳥矢ケ崎古墳群，花巻市熊堂古墳群，恵庭市恵庭古墳群など）。位階を有し，あるいは君（公）の称号を持つ蝦夷の族長は文献史料にも多く名前を残しており，考古資料とあいまって，これら族長層中にひきいられた蝦夷の集団は政府側との結びつきが深かったことを物語っている。

しかし奈良時代の末から平安時代になると，政府側の影響力が強まり，部族制社会の構造も徐々に変化していった。伊治村と斯波村との対立（『類聚国史』巻190俘囚延暦11年正月11日条）や邑良志閇村と爾薩体村，幣伊村，都母村との対立（『日本後紀』弘仁２年７月29日条）は，もともと対立関係にあった部族間，あるいは部族内の争いに政府側が介入し，蝦夷系の住民をして反政府の姿勢を取る蝦夷を攻撃させた例である。政府側は『夷（賊）を以て夷（賊）を制する（討つ）」作戦を上策としたが（『日本後紀』弘仁２年７月29日条，『三代実録』元慶２年７月10日条，９月５日条），政府側の政策さえもが，蝦夷の集団どうしが戦いあうような社会状況をふまえる部分があったのである。

各部族は政府側の介入もあって対立を激化させ，また分裂をくりかえしたのである。村とされたものにも小規模のものが多くなっている（『三代実録』元慶２年７月10日条の上津野，火内・楹淵・野代・河北・腋本・方口・大河・堤・姉刀・方上・焼岡の十二村，添河・覇別・助川の二村，応徳３年正月23日源頼俊申状の閉伊七村『平安遺文』９巻所収），また政府側の力があまり及ばなかった奥地の集団間でも武力抗争が激化した。このような現象は，北海道の一部までも巻き込んでいるようである（『文徳実録』斉衡２年正月15日条，『三代実録』貞観17年11月16日条，元慶５年８月14日条，『日本紀略』寛平５年閏５月１５日条）。高地性集落や環濠集落の出現にはこのような背景があったのである。末期古墳が作られなくなるのもこれらの現象と関係するのかもしれない。

前九年の合戦，後三年の合戦のころの東北北部は，安倍氏，清原氏の勢力が，盛岡市秋田市以北にも及び，平泉藤原氏は安倍氏，清原氏の勢力を継承した。近年では安倍氏は胆沢の鎮守府によって地域支配をより確かなものにするために登用された，また清原氏も同じ理由からおそらくは秋田城によって登用された豪族であるとされる。安倍氏や清原氏の本流は，決して単純に蝦夷系とはいえない存在なのである。平泉藤原氏についても同じことがいえ，むしろ東国の兵（つわもの）と通じる側面がある存在であった。しかしながら安倍氏，清原氏，平泉藤原氏の一族や配下には多くの蝦夷系の豪族があったことも事実で，これら蝦夷系の豪族は部族制社会の構造を保っていた。安倍氏，清原氏，平泉藤原氏のこのような権力構造は，しばしば武力抗争をも含む内部対立に展開しうるものであった。前九年の合戦における安倍頼時と安倍富忠の対立は，その一例であるし，後三年の合戦もそもそもの原因は清原氏の内部対立によるものであった。さらに平泉藤原氏の配下といわれながら，実際には文治五年奥州合戦にも平泉藤原氏本流とは別の行動をとった河田次郎，大河兼任らの存在もあげることができるであろう。

したがって安倍氏，清原氏，平泉藤原氏本流の有力拠点は必ずしも単純に北日本平安時代環濠集落・高地性集落の系統からのみは理解できない，東国の兵の館と通ずる部分があったことが想像される（安倍氏の岩手県金ケ崎町の鳥海柵，平泉藤原氏の柳之御所遺跡）ものの，安倍氏，清原氏，平泉藤原氏の一族や配下，勢力下の大小の豪族の拠点やその支配地域には，依然として防禦性集落，逃込みや見張りの機能を持つ集落，さらには立て籠りのための城というべきものが存在したのである。大河兼任の乱では兼任が外浜と糠部の間の多宇末井の梯を城郭として立籠ったとの風聞があったという（『吾妻鏡』建久元年２月12日条）。そして大河兼任の乱が終結し，鎌倉幕府の支配が東北北部に完全に及ぶようになってもなお，在地においては北日本平安時代環濠集落・高地性集落の系統を引く集落や城が作られ続けた。おそらくは部族制社会の名残がなお存在し，幕府支配が不安定だったためなのであろう。

ところで近年調査が進められている乙部町小茂内遺跡は，縄文土器や竪穴住居が検出されているので，北海道におけるそのような遺跡の年代のさかのぼる例と思われ，平安時代におさまるものであろう。したがって東北北部のものと同じ年代に同じ目的で作られたものと見て良い。北海道は鎌倉時代以後も，政府の直接支配の外にあり，和人の政治的，経済的な影響のもとにではあるが，なお一層部族制社会が展開する余地があった。アイヌ民族の英雄叙事詩ユーカラは，そのような社会の姿を背景にしていると考えられる。したがって北海道では防禦性集落，あるいは見張り，逃込みの集落も必要でありつづけたであろう。北海道のチャシは形態上前述第二のタイプに類似するものが多いように思われる。チャシの系譜については種々の説があるが，少なくともその根源のひとつに東北北部の平安時代高地性集落や環濠集落を考えることは，かなりの妥当性があるのではないかと考えている。

なお西日本から東日本の一部に及ぶ地域の弥生時代を中心とする時期の高地性集落が問題となりはじめた時期にもいわれたように，高地性集落と山地における焼畑農耕などの畑作農耕，あるいは狩猟活動などとのかかわりをまったく否定するつもりはない。防禦的な体制をとりつつも，それが生業活動と完全にきりはなされた状況下にあったということも考えにくいであろう。ただしそれも部族制社会という条件下のことであったと考えたいのである。

4．おわりに

以上，これまでに得られている僅少な情報によって，北日本における平安時代環濠集落・高地性集落の状況を述べ，それが古代蝦夷の部族社会を背景として出現したであろうとの私見を述べ，また北海道のチャシとの関連についても推論を加えた。しかしながら，この種の遺跡について知られていることはあまりにも少ない。年代，構造などの基本的なことさえも，今後の研究によらざるを得ないのである。それにもかかわらずこのような特集を組んでいただいたのは，この種の遺跡の理解が北海道を含む北日本の古代史の鍵になるであろうと思われること，そしてこの地域の歴史をも組み込んだ歴史なくしては，真の意味での日本史の構築は不可能であろうと思うからである。北日本においてはもうひとつの古代史があり，未完に終わったとはいえもう一つの古代国家形成への歩みがあったのである。この種の遺跡の意味するところについて，北日本の研究者だけではなく，古代社会に関心を寄せるすべての方々にもお考えいただきたいと思う。

参考文献

1）角田文衛「古代ヨーロッパの高城」『ヨーロッパ古代史論考』，1980，平凡社
2）佐藤重紀「陸奥国上北部の竪穴」『東京人類学会雑誌』５－51，1890
3）佐藤重紀「竪穴及チャシコツ」『東京人類学会雑誌』６－56，1890
4）伊能　生（伊能嘉矩）「陸中のチャシコツ」『人類学雑誌』22－251，1907
5）小田島禄郎「県下に於ける竪穴及「チャシ」に関するもの其一」『史蹟名勝天然記念物調査報告』４，1924
6）斎藤　忠「北日本における古城砦の概観」，江上波夫「館・チャシとゴロディシチェ」『館址，東北地方における集落址の研究』，1958，東京大学東洋文化研究所
7）草間俊一「岩手県のチャシと鳥海柵」『岩手史学研究』33，1960
8）沼館愛三『南部諸域の研究』，1981，伊吉書院
9）岩手県教育委員会『岩手県中世城館跡分布調査報告書』，1986
10）青森県教育委員会『青森県の中世城館』，1983
11）秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』，1981
12）『日本城郭大系』２　青森・岩手・秋田，1980，新人物往来社
13）河野常吉「チャシ即ち蝦夷の砦」『札幌博物学会会報』１－１，1906
14）『日本城郭大系』１　北海道・沖縄，1980，新人物往来社
15）北海道教育庁『北海道のチャシ』，1983
16）宇田川洋ほか編『北海道のチャシ集成図１，道東北篇』，1985
17）北海道チャシ学会編『アイヌのチャシとその世界』，1994，北海道出版企画センター
18）工藤雅樹「子飼沢山遺跡発掘調査の概要」『考古学ジャーナル』388，1995（予定）

西根町子飼沢山遺跡、暮坪遺跡、岩手町横田館遺跡発掘調査概要

福島大学行政社会学部考古学研究室

The preliminary reports of excavations at Kogaizawayama site, Nishinemachi, Kuretubo site, Nishinemachi, Yokodadate site, Iwatemachi

The Department of Archaeology, Faculty of Administaration and Social Sciences, The University of Fukushima

岩手考古学第8号　1996年3月　1～40ページ　別刷

西根町子飼沢山遺跡、暮坪遺跡、岩手町横田館遺跡発掘調査概要

The preliminary reports of excavations at Kogaizawayama site, Nishinemachi, Kuretubo site, Nishinemachi, Yokodadate site, Iwatemachi

福島大学行政社会学部考古学研究室

The Department of Archaeology, Faculty of Administaration and Social Sciences, The University of Fukushima

1．はじめに

本稿は工藤雅樹（福島大学行政社会学部教授・岩手県文化財保護審議会委員）を研究代表者とする文部省科学研究費補助金（総合研究A、研究題目、東北北部におけるいわゆる蝦夷館の研究）を得て実施した岩手県岩手郡岩手町横田館遺跡、岩手郡西根町子飼沢山遺跡、西根町暮坪遺跡の発掘調査の概要である。科学研究費補助金は平成５年度から７年度までの３年間にわたって交付されたが、平成５年度は東北北部におけるいわゆる蝦夷館についての既往の研究の整理や各地の関連遺跡の踏査などを行ない、平成６年度に横田館遺跡（４.29～５.９・５.21～22）と子飼沢山遺跡（９.23～10.４）、平成７年度に暮坪遺跡（７.30～８.12・８.19～20）の発掘調査を実施した。

なお蝦夷館とは、かつて蝦夷が居住したとの伝承を有する遺跡の俗称で、その実態は東北北部に分布する平安時代を中心とする時期の高地性集落で、この種の遺跡は東北北部に普遍的に分布する。蝦夷館という用語は学問上の用語としては必ずしも適切ではないが、本稿では便宜上、平安時代高地性集落の語とともに蝦夷館の語を併用する。

この種の遺跡についての関心は明治時代にさかのぼり、戦前には小田島禄郎氏の注目すべき研究がある。また沼館愛三氏も東北地方の城郭研究の立場から独自の研究成果を残した。戦後になると東京大学東洋文化研究所による東北地方の「館址」の発掘調査が行なわれ、岩手県でも草間俊一氏が着目している。その後各県で中世城郭の基礎資料の集成がはかられ、そのなかでもこの種の遺跡が取りあげられたし、岩手県でも本堂寿一氏、高橋與右衛門氏、近谷秀雄氏、室野秀文氏、高橋昭治氏らがこの種の遺跡に強い関心を寄せておられた。しかしこの種の遺跡の発掘調査が実施されたことはなく、そのため遺跡の構造や年代などの具体的な状況は不明のまま近年に至っていた。筆者は古代の蝦夷社会を考える上でもこの種の遺跡の発掘調査が必要であると考え、多くの方々のご賛同をいただいて文部省科学研究費補助金を申請していたが、幸いに平成５年度にいたり採択されたことから本稿で報告する三遺跡の発掘調査にいたったものである。

三遺跡の発掘調査はともに小規模なもので、それぞれの遺跡の全容を解明したとはいえず、調査成果についても未だ充分な分析を行なうにいたっていない。しかしこの種の遺跡の調査例としては岩手県内はもちろん東北地方でも数少ないものであり、この種の遺跡の実態を多くの方々に知っていただく意味でも、とりあえず調査で知ることができた成果の概要を報告しておくことにする。

今回報告する遺跡のうち子飼沢山遺跡と暮坪遺跡は平安時代の高地性集落である。子飼沢山遺跡と暮坪遺跡で各二軒発掘した住居の年代は、大型の住居の柱穴のうちの二本が住居の壁面に接する構造や土師器の特徴から、いずれも10世紀後半から11世紀前半ころのものと考えられる。また横田館遺跡は出土遺物がなかったために時期を確定できなかったが、単数の郭を複数の土塁がめぐる全体構造や竪穴住居跡の構造から見て、平安時代までさかのぼるものではなく中世に属するものと考えられる。ただし、同一地域にある一方井城と比較すると、横田館は単郭式で、内部に竪穴式住居があるなど古い要素が見られることから、とりあえず中世の中では比較的古い鎌倉時代前後の年代を考えておきたい。

2．遺跡の位置と自然環境

今回報告する三つの遺跡が所在する岩手町及び西根町は、盛岡市の北方、岩手郡の北端にあたり、県の中央を南流する北上川の最上流域にあたり、東には北上山地が連なり、西は奥羽山脈に属する連峰に取り巻かれ、中央部は盆地状を呈している。この地域は低い丘陵地のほか、北上川及びその支流の松川・赤川・一方井川沿いの段丘及び氾濫原からなり、丘陵間や段丘上には送仙山・白屋山・丹谷山・野駄森などの残丘的に残る幾つかの孤立山体がある。岩手町落合付近で一方井川は北上川に注ぐが、これより約２km上流、一方井盆地の東端で太田川が一方井川に合流する。一方井川と太田川の合流点に向けて突出する丘陵の先端部に横田館遺跡がある。西根町付近は、西根盆地の西半分を占め、町域内には岩手山（海抜2041ｍ）の北斜面と七時雨山（海抜1060ｍ）の南斜面を含んでいる。町の南部では松川と赤川が岩手山の裾を回るように流れ、玉山村付近で北上川へ注いでいる。一方西根町平館付近では七時雨山方面から南流する涼川が赤川に合流している。これより約２km上流では荒木田川が、約７km上流では暮坪川が涼川に注いでいる。荒木田川から分岐する瀧の沢と子曲沢に挟まれる子飼沢山の山頂には子飼沢山遺跡が、暮坪川から分岐する梨の木沢と斗内沢に挟まれる暮坪山の山頂には暮坪遺跡がある。七時雨山を最高峰とする山系は奥羽山脈中の八幡平（海抜1614ｍ）から東北方向に分岐しており、二戸郡と岩手郡の境を成し、山系の北側は安比川水系となる。安比川は二戸市馬仙峡付近で馬淵川に合流する。子飼沢山と暮坪山は七時雨山系中の御月山（海抜954.4ｍ）から南東方向に伸びる支脈上にある。子飼沢山と暮坪山の距離は直線で約2.5kmである。

3．遺跡周辺の歴史的環境（第１図）

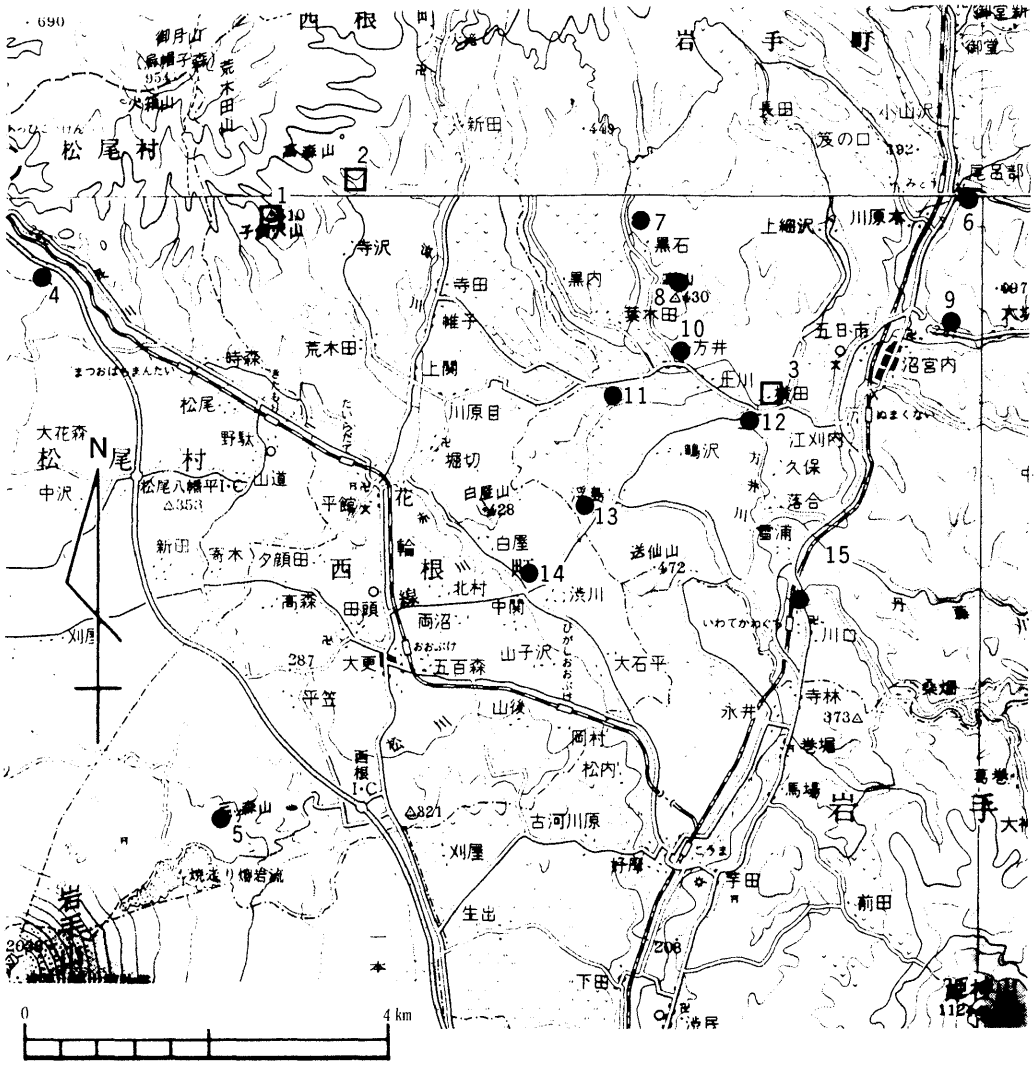
横田館のある岩手郡岩手町、子飼沢遺跡・暮坪遺跡のある同西根町は、その地名にもあらわれるように盛岡市以北の北上川の上流域に置かれた奥六郡のひとつとされる岩手郡に包括される地域である。この地域の遺跡は、おおよそ縄文時代のものは川筋に面した低丘陵地の裾部や頂上部にあり、古代のものは平坦地や半湿地状の地域にあり、時期によって立地が異なるようである。

この地域の遺跡は旧石器時代のものは確認されていないが、縄文時代は早期から晩期にわたっている。縄文時代を代表する集落遺跡としては、中期の倍田VI遺跡（岩手町）・間館Ⅰ・II遺跡（西根町）、後期の川口II遺跡（岩手町）・上斗内III遺跡（西根町）、晩期のどじの沢遺跡・豊岡遺跡（以上岩手町）などがある。弥生時代の遺跡は縄文晩期に比べて規模は縮小しているようである。またこの地域では、円筒土器と大木式土器が共にみられ、北方系とされる後北式土器や北大式土器が混入することから、北方と南方の要素の接触する地域でもある。

古代の遺跡は平安時代になって一気に増加する。集落遺跡は河川流域などの稲作の適地に集中するようである。その前段階には浮島古墳（岩手町）・谷助平古墳（西根町）といった末期古墳が、同時期とされる仙波堤遺跡・今松遺跡（以上岩手町）を代表する集落遺跡を囲むように存在する。また流霞道など古代の官道ともいわれる道沿いには黄金堂遺跡(岩手町)、白坂観音遺跡（西根町）の寺院跡や関連遺跡もみられる。

中世以降の遺跡のほとんどは館跡となり、一方井城・沼宮内城・川口城・尾呂部館（以上岩手町）や荒木田城跡（西根町）などが点在する。館跡の中には、今回調査された横田館のように年代の不詳のものも多い。

今回調査された三遺跡のうちの子飼沢山遺跡と暮坪遺跡は西根町寺田地区にあって、極めて近似する内容を有する高地性集落である。暮坪遺跡は小田島禄朗氏によって高地にある古代の住居跡として『史蹟名勝天然記念物調査報告４』(1924) に掲載されるなど早くから注目されていた。



1．子飼沢山遺跡
2．暮坪遺跡
3．横田館
4．小屋の沢高地集落
5．三ツ森山高地集落
6．尾呂部館
7．大森どじの沢小堂跡（祭祀跡）
8．黄金堂（寺院跡）
9．沼宮内城
10．一方井城
11．今松遺跡（集落跡）
12．仙波堤遺跡（集落跡）
13．浮島古墳
14．谷助平古墳
15．川口城

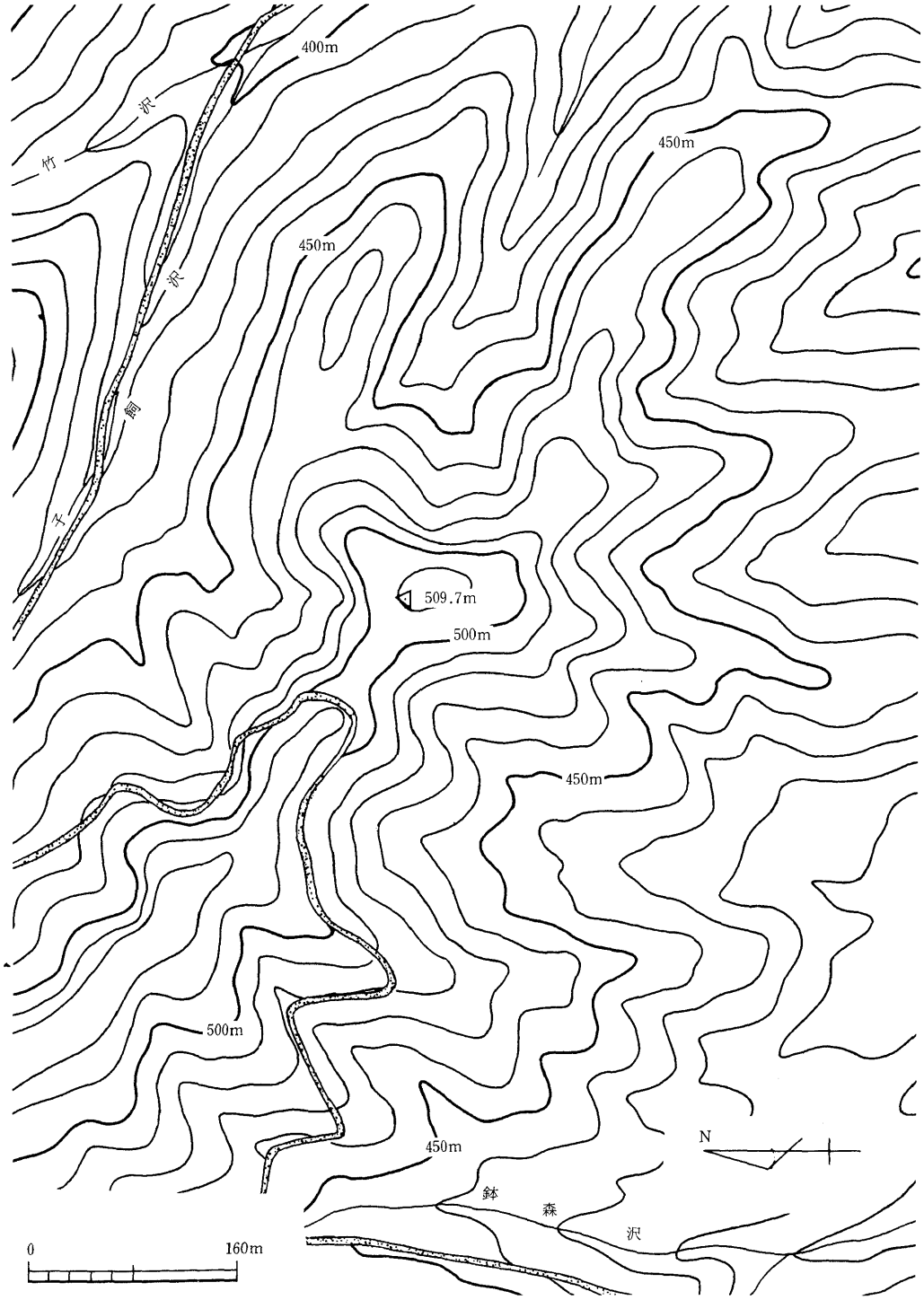
第１図　岩手町・西根町主要遺跡分布図

4．子飼沢山遺跡

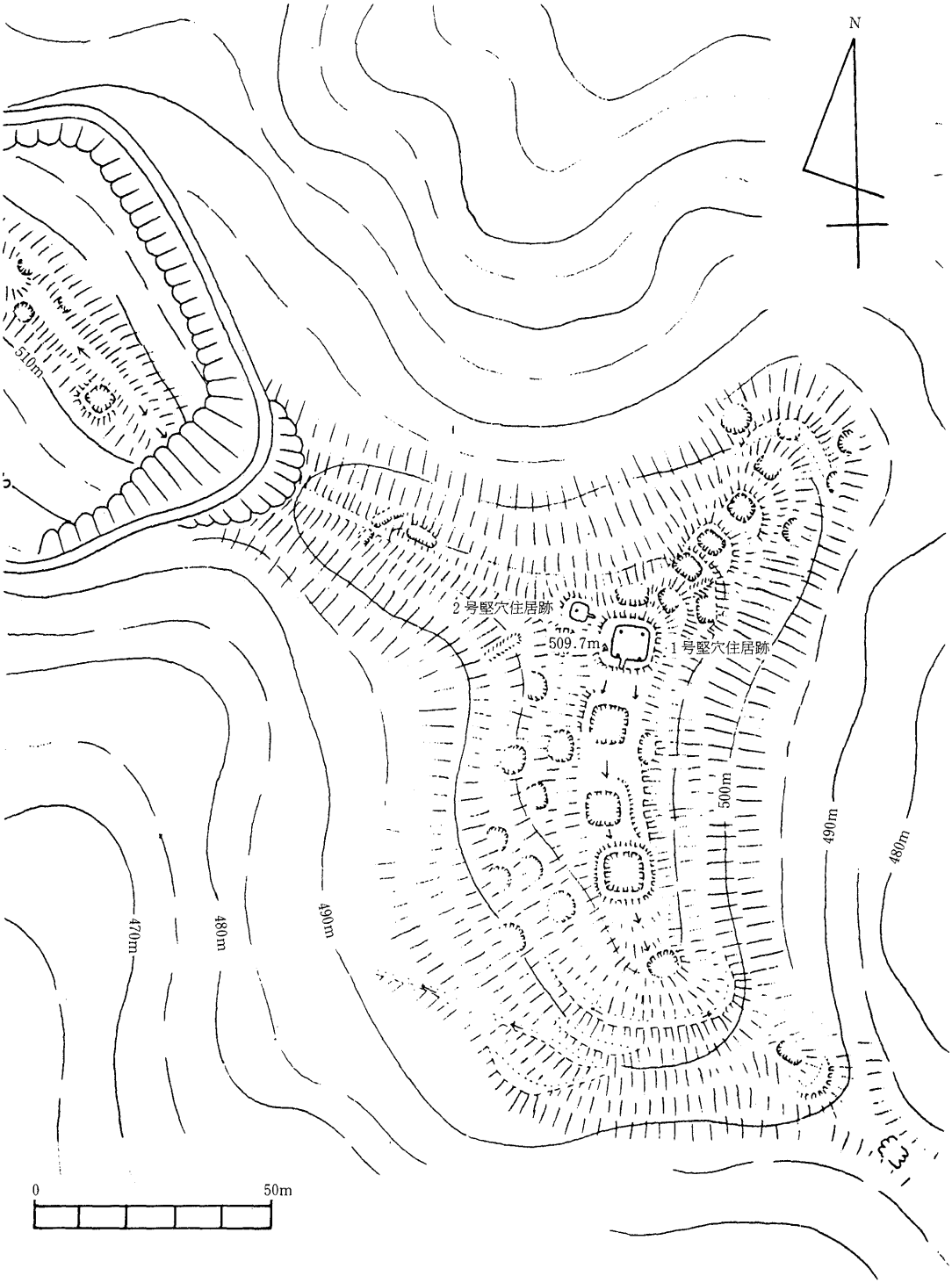
概要（第２図、第３図）（写真１）

子飼沢山遺跡は岩手郡西根町大字荒木田字鉢ヶ森の国有林内に所在する標高509.7ｍの子飼沢山の山頂一帯にひろがる。山麓の間館の集落付近の標高は328ｍほどで、180ｍ以上の比高差がある。山頂からは幅が狭く、傾斜の急な尾根が、ほぼＹ字形に三方向にのびている。このうち南へ走る尾根がもっとも幅が広く、傾斜が緩やかで、これを下ると麓の間館集落へ向かうことができる。山頂付近には竪穴住居跡が窪みとなって残っており、南へのびる尾根上に大型の竪穴住居跡が４基ならび、その西側斜面および北東方向にのびる尾根には、小型の竪穴住居跡が散在しているのが確認できる。また北西方向にのびる尾根上には、山頂の三角点から100ｍ以上離れたところに、２～３基の小型の竪穴住居跡が存在するようである。本遺跡は本堂寿一、高橋與右衛門、近谷秀雄氏らによって注目されていた。（『日本城郭大系』２、1980）今回はこのうち、山頂の三角点に接する大型の竪穴住居跡（１号竪穴住居跡）とその北東にある小型の竪穴住居跡（２号竪穴住居跡）の各１基の発掘調査を行なった。

写真１　子飼沢山遺跡遠景



第２図　子飼沢山遺跡周辺地形図



第3図　子飼沢山遺跡全体図（室野秀文氏作図）

1号竪穴住居跡（第4図）（写真2）

1号竪穴住居跡は、子飼沢山のY字状の尾根の分岐点となる頂上部の比較的平坦なところに窪地となって確認される。

＜平面形＞方形。規模は約6.1×5.7m。主軸方向はN－7°－E。

＜堆積土＞4層に分層され、全体的に黒褐色を呈する。自然堆積である。覆土には凝灰岩が含まれ、カマド付近を中心として崩落土の下に炭混じりの層が認められる。

＜壁面＞壁高は東壁で約60cm、西壁で約90cmを測る。床面より垂直に立ちあがる。

＜床面＞平坦であり、堅くしまる。壁際の溝は幅10～15cm、深さ1～2cmである。ただし、カマドのある南壁でははっきりしない。住居内中央には風倒木の痕跡があり、床面の石がかなり動いている。なお、北西隅には以前の調査の痕跡も認められる。

＜柱穴＞住居内の四隅より検出され、南側の2個は南壁に接する。直径は40cm前後、底径は20cm前後であり、深さは約40～65cmである。

＜炭化材・焼土＞カマド付近と西壁沿いには建築部材の一部と思われる板材やカヤ状の植物の炭化したものがみられる。また住居内の南西部で確認された焼土は、中央部が青っぽく還元したような状態であった。出土遺物に鉄挺、鉄滓もみられることから小鍛冶跡の可能性も考えられよう。

＜出土遺物＞鉄製品10点、土師器甕数点と耳皿、須恵器片、砥石、加工痕の認められる炭化した木製品数点、穀物粒、木の実が出土する。その多くはカマドのある南西隅と北西隅の壁近くの炭混じりの層から出土した。土師器の耳皿は北西隅の崩落土下から出土した。また大甕と思われる須恵器片はすべて同一固体と思われ、北壁側に集中して出土した。穀物粒はカマド近くなど数ヶ所で出土したが、北ベルトを外した際に出土したものは握り拳大にまとまっていた。

1号竪穴住居跡カマド（第5図）

＜位置＞住居跡南壁の西寄り。主軸方向はN－12°－W。

＜構造＞掘り込み式。

＜全長＞約2.2m。

＜袖＞石組みで構築され一部粘土を用いて補強しており、「ハ」の字型に開く。燃焼部の焼土の範囲から考えれば、右袖は1/3、左袖は3/4ほど残存している。

＜燃焼部＞中央やや左寄りに支柱が存在する。天井部は残っていない。底面は住居跡床面とほぼ同一の高さであるが若干くぼんでおり、全面加熱され焼土が広がっている。

＜煙道部＞長さは約1.2m。石を組んで構築され、壁際に若干残存するだけである。天井部は残っ

写真２　子飼沢山遺跡１号竪穴住居跡（南から）

ていないが、石組みで構築されたと考えられる。燃焼部付近から煙道部中程まで焼土が広がっている。

<煙出し部>石を組んで構築され、残存状況は良好である。底面は若干くぼんでいる。

２号竪穴住居跡（第６図）（写真３）

２号竪穴住居跡は調査区域の北西、１号竪穴住居跡の北西約５ｍの緩やかな斜面上に位置する。調査前の段階では完全に埋まりきらずに窪地となっており、地表面から確認することができた。攪乱などは受けておらず、残存状況は良好であった。

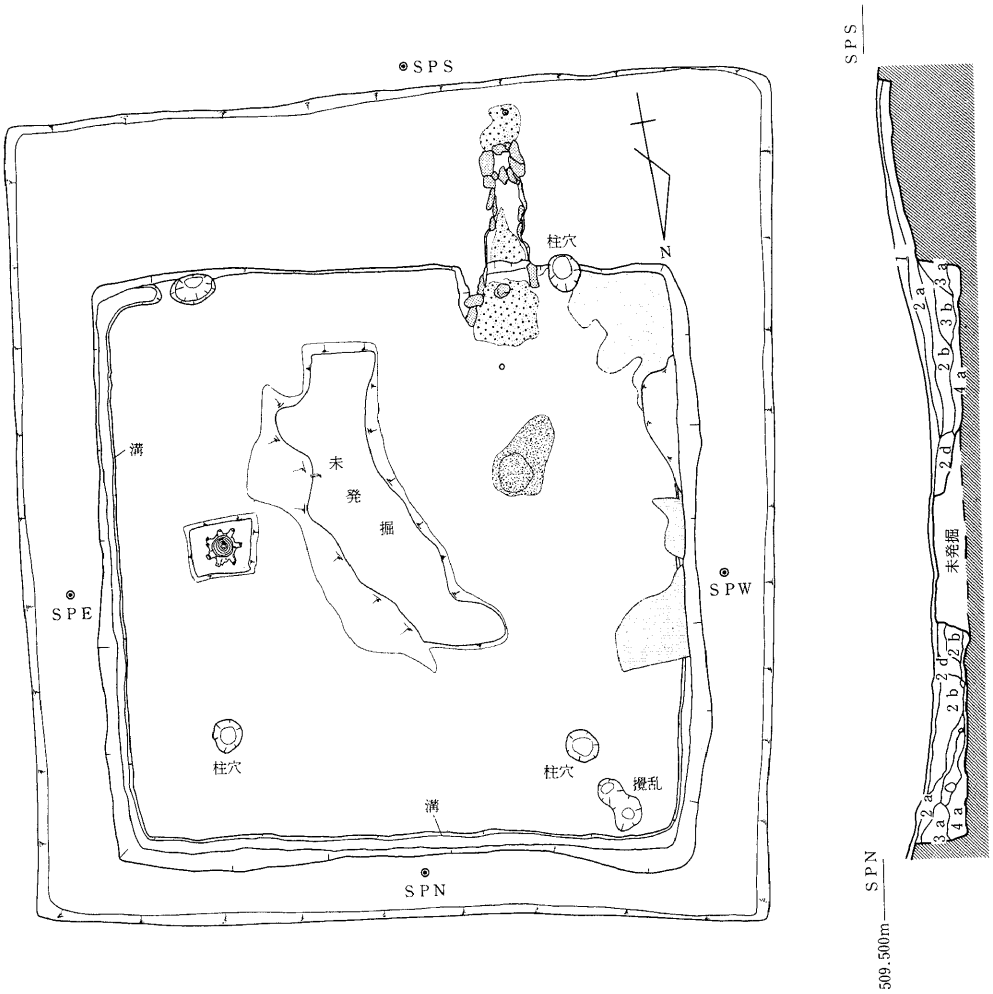
<平面形>隅丸方形。規模は約2.5ｍ×2.5ｍ。主軸方向はＮ－75°－Ｅ。

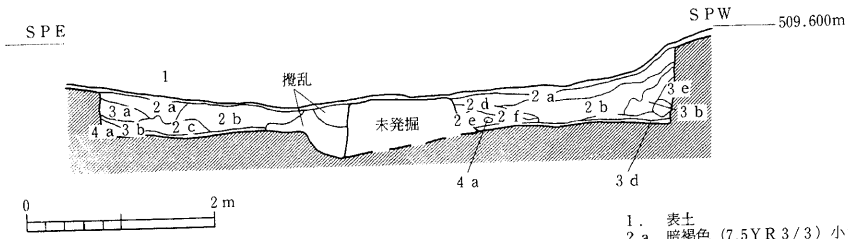
<堆積土>10層に分層された。色調は黒褐色が主体である。崩落土には細かい石や炭が含まれている。

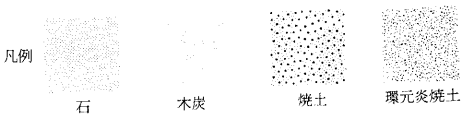
<壁面>壁高は北壁で70cm、西壁で70cm前後、南壁で１ｍ前後、東壁で45cm前後を測る。壁の立ち上がりはほぼ垂直であるが、上部は崩落によりやや外傾している。

<床面>平坦であり、堅くしまっている。壁際に幅10cm前後、深さ３cmほどの溝が一周する。

<柱穴>床面から２個確認された。直径35cm、底径20cm、深さ25cmの柱穴が床面中央のやや西

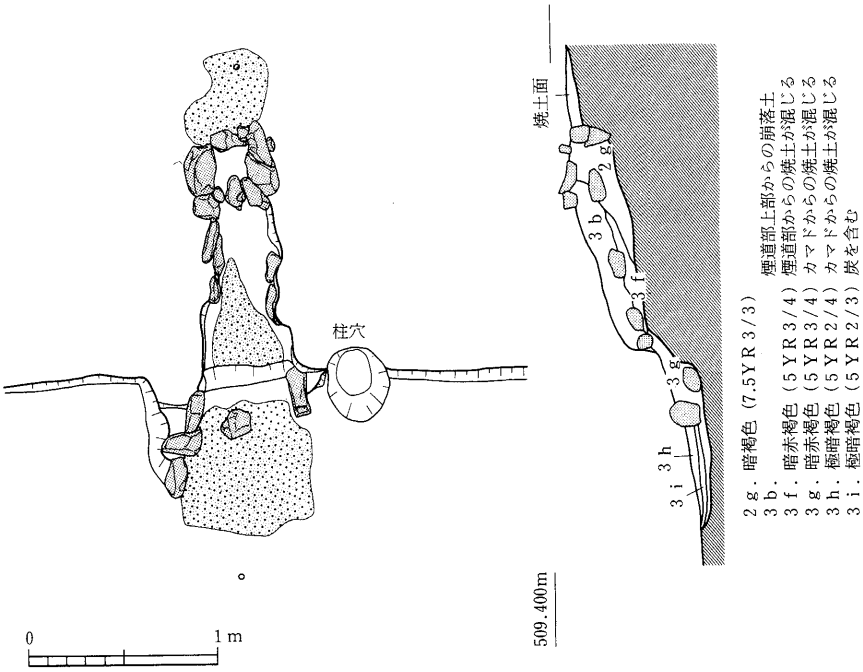




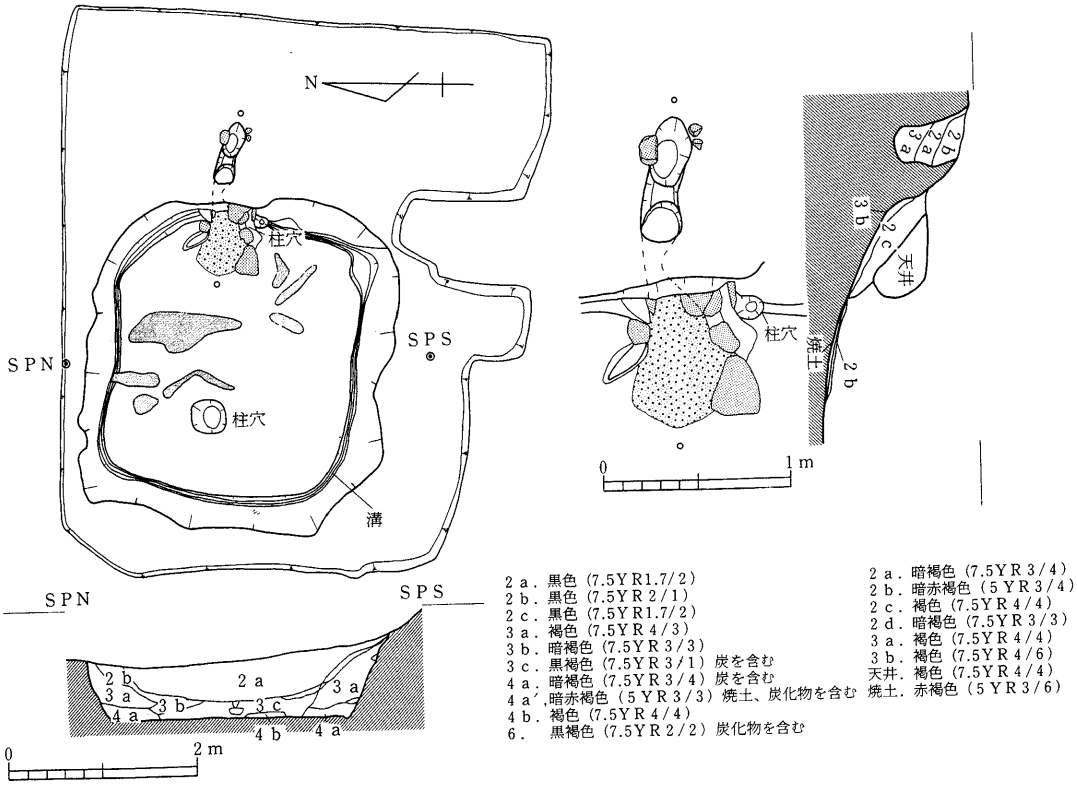


1. 表土
2a. 暗褐色（7.5YR3/3）小さな石を含む
2b. 黒色（7.5YR1.7/1）
2c. 黒色（7.5YR2/1）
2d. 黒褐色（7.5YR2/2）小さな石の粒を多く含む
2e. 黒褐色（7.5YR2/2）
2f. 極暗褐色（7.5YR2/3）
3a. 褐色（7.5YR4/4）
3b. 暗褐色（7.5YR3/4）
3c. 暗褐色（7.5YR3/4）
3d. 褐色（7.5YR4/4）凝灰岩をブロック状に含む
3e. 暗赤褐色（7.5YR3/6）焼土
4a. 黒褐色（7.5YR3/2）炭を含む

第4図　子飼沢山遺跡1号竪穴住居跡



第5図　子飼沢山遺跡1号竪穴住居跡カマド



第6図　子飼沢山遺跡2号竪穴住居跡

寄りに、直径15cm、底径10cm、深さ20cmの柱穴がカマドの右袖と壁に接して検出された。

＜炭化材・焼土＞床面から多量の炭化材が検出された。特に北壁付近には柱状の炭化材が集中していた。焼土はカマド周辺と南壁に確認された。

＜出土遺物＞土師器の甕が３点出土した。うち１個は器高７cmほどの小型の甕であり、カマドの袖近くから出土した甕は完形品であった。鉄製品はノミや刀子など４点、カマド煙道部からは鉄滓が１点出土した。

２号竪穴住居跡カマド（第６図）

＜位置＞住居跡東壁の北寄り。主軸方向はN－80°－W。

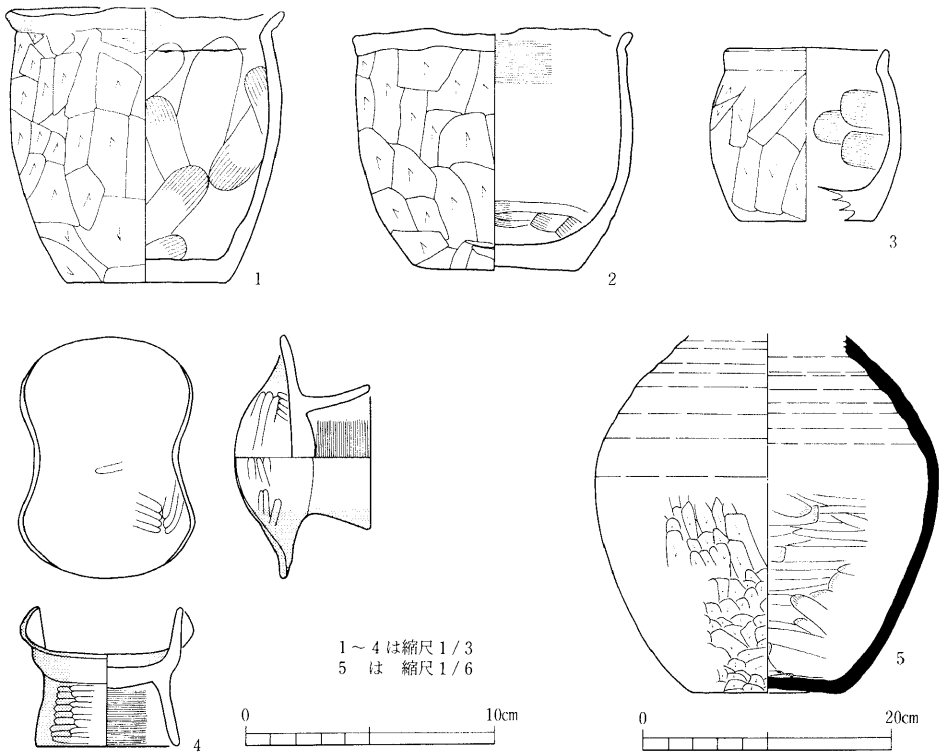
＜構造＞くり貫き式。

＜全長＞約1.6m。

＜袖＞石を組んで構築され一部粘土を用いて補強しており、「ハ」の字型に開く。石組みの残存状況は良好である。

＜燃焼部＞天井部は残存しない。底面は平坦で住居跡床面とほぼ同一の高さであり、全面に焼土が広がっている。

写真３　子飼沢山遺跡２号竪穴住居跡（西から）



第7図　子飼沢山遺跡出土土器

<煙道部>長さは約0.9mを測る。地山をトンネル状に掘り込んで構築されている。天井部は住居跡壁際に一部残存している。

<煙出し部>深さ約35cmのピット状になっている。周囲には大小3つの石が存在する。

遺物

1・2号竪穴住居跡ともに鉄製品が多く出土し、刀子の占める割合が大きい。1号竪穴住居跡より出土の木製品には椀の口縁や高台の一部と認められるものもある。

出土土器観察表（第7図）（写真4・5）

図版番号	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	胎土 焼成 色調	出土状況 備　考
1	土師器 甕	11.2 6.9 11.0 10.9	3/5が残存。口縁部が短く外反。胴部はわずかに膨らむ。	非ロクロ整形。胴部外面は粗い縦方向のヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。内面はユビナデ。積上げ痕残る。	やや粗い 良好 褐灰色	2号住居跡ベルト内出土。全体にすすが付着。
2	土師器 甕	11.8 6.8 9.8 11.0	完形。口縁部が短く外反。胴部はほとんど膨らまない。	非ロクロ整形。胴部外面は縦方向の粗いヘラケズリ。口縁部内面ヨコナデ。内面下部にユビナデ。	やや粗い 良好 にぶい黄橙色	2号住居跡カマド前出土。全体にすすが付着。
3	土師器 甕	6.2 5.6 7.0 7.7	口縁部から底部の1/3が残存。口縁部はほぼ直立。胴部は丸く膨らむ。	非ロクロ整形。胴部外面は縦方向のヘラケズリ。内面はユビナデ。	やや粗い 良好 にぶい褐色	2号住居跡4層出土。
4	土師器 耳皿	9.8 5.7 5.6 —	片方の耳を除いて4/5残存。耳は直立する。ハの字状の高台がつく。	ロクロ整形。両面黒色処理と見られるが加熱によりほとんどが飛んでいる。内外面ともにヘラミガキ。	密 良好 浅黄橙色	1号住居跡北西付近4層出土。
5	須恵器 大甕	— 9.8 — 14.2	口縁部欠ける。肩部2/3、底部から胴部にかけて1/8残存。肩部が張る。	ロクロ整形。胴部下半は縦方向に下方にヘラケズリ。内面は横方向にヘラナデ。	密 良好 黄灰色	1号竪穴住居跡北側2層～床面出土。1部赤く焼ける。

法量の数値は上から、口径、底径、器高、最大胴径の順に記載する。
なお、今回の発掘調査で出土した須恵器片は、以前に出土したものとも接合した。

写真 4　子飼沢山遺跡出土土器　土師器甕

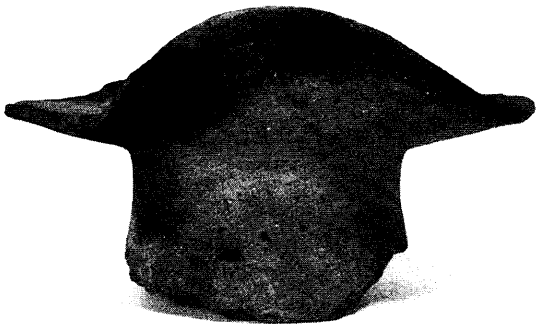


写真 5　子飼沢山遺跡出土土器　耳皿

子飼沢山遺跡出土鉄製品観察表（第８図）（写真６）

図版番号	種類	長さ×幅×厚さ(cm)	出土状況	備考
1	鉄挺	10.5×3.0×0.6	１号竪穴住居跡北東	
2	ノミ	12.9×0.8×0.6	２号竪穴住居跡東側３層	
3	鎌	6.5×2.5×0.1	１号竪穴住居跡北西壁床面	刃がやや湾曲気味である。
4	刀子	11.0×1.0×0.2	２号竪穴住居跡西側３層	
5	切羽	3.8×1.6×0.9	１号竪穴住居跡北西壁床面	
6	刀子	18.8×1.2×0.2	１号竪穴住居跡南西西壁４層	木製の柄が残り、刃の中央が減っている。
7	直刀	23.1×2.0×0.5	１号竪穴住居跡北西床面	目抜き穴が残る。
8	用　途不明品	28.9×1.0×0.2～0.6	１号竪穴住居跡南西西壁４層	木製の柄らしきものが残る。工具の一種と思われる。

数値は残存部位からのものである。

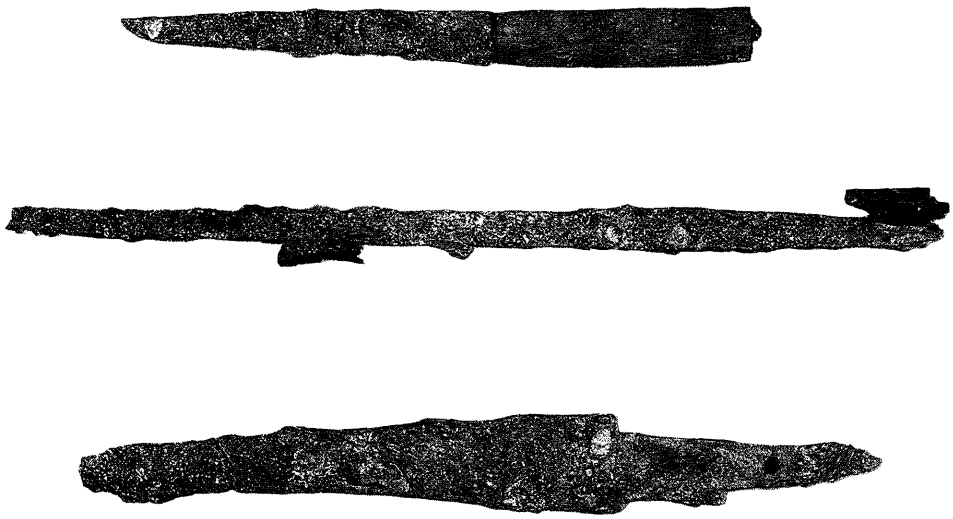
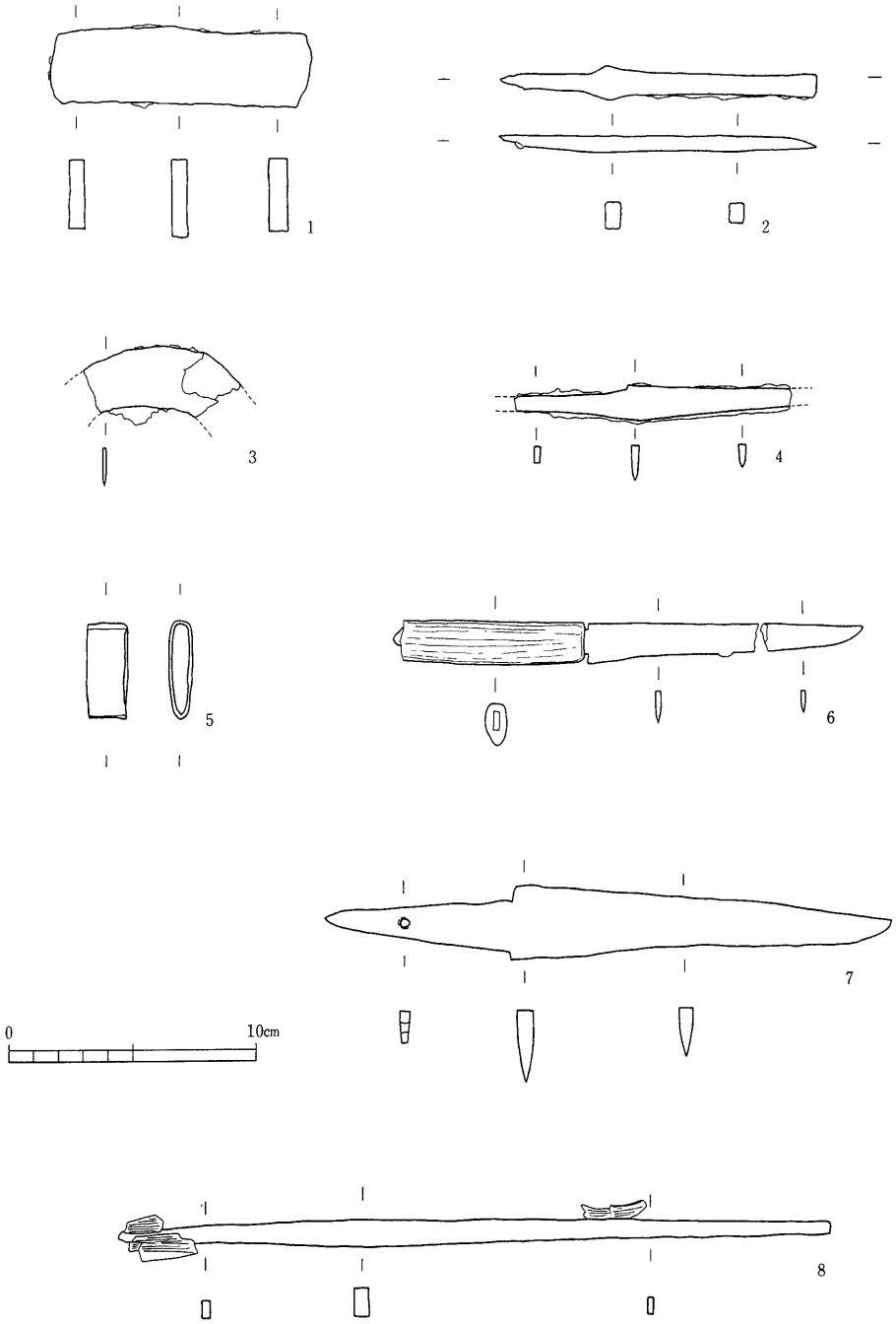


写真６　子飼沢山遺跡出土鉄製品



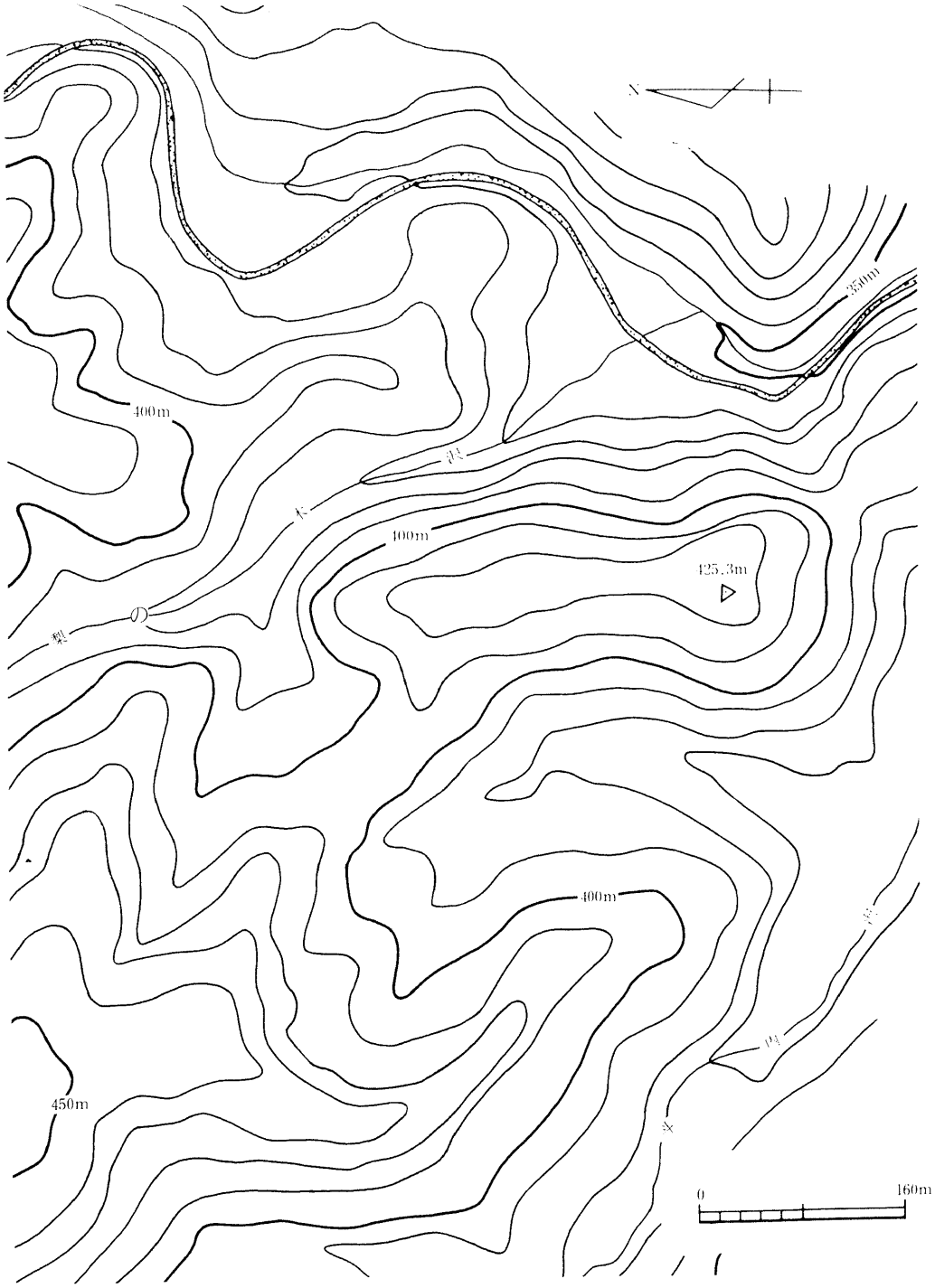
第８図　子飼沢山遺跡出土鉄製品

5．暮坪遺跡

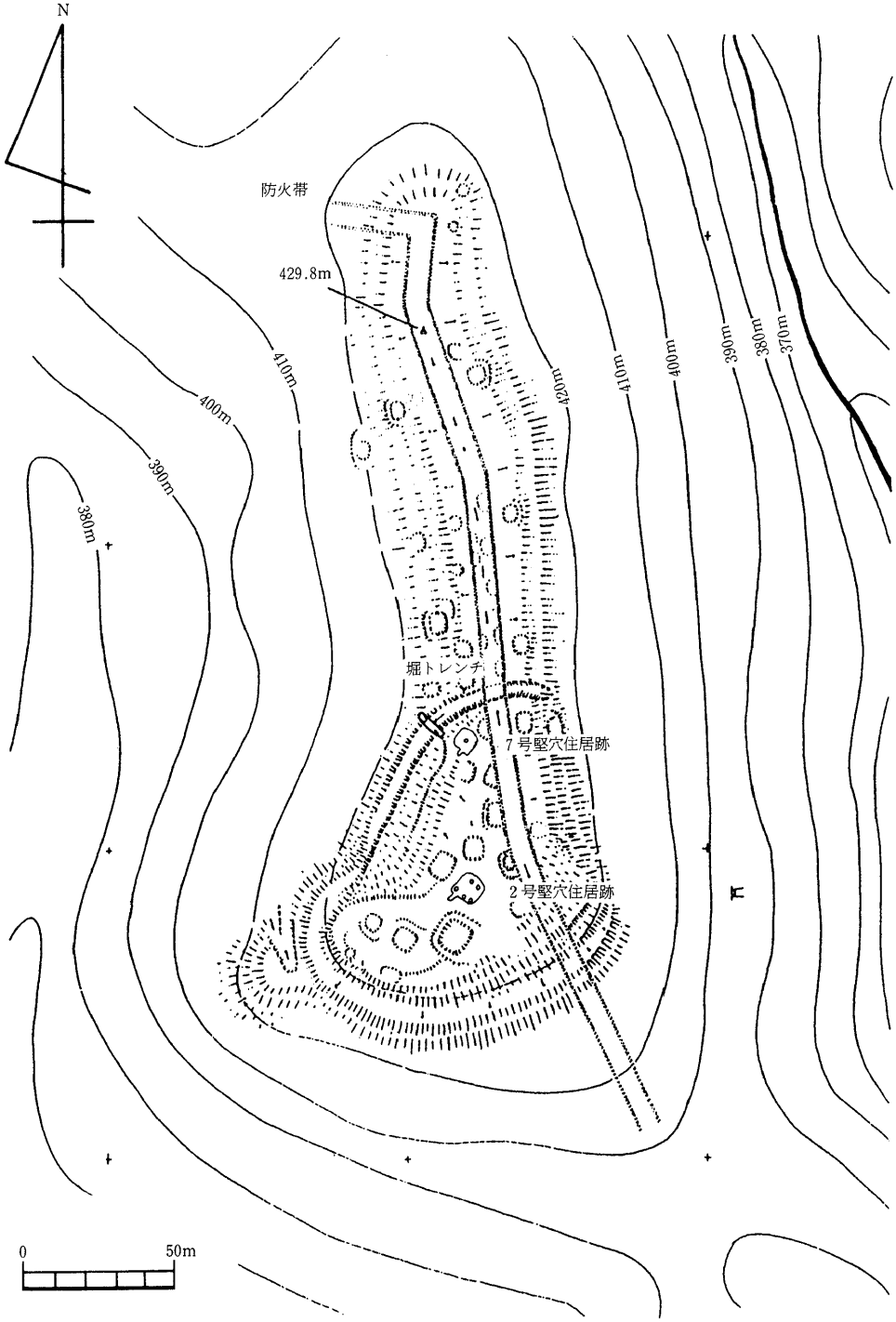
概要（第９図、第10図）（写真７）

暮坪遺跡は岩手県岩手郡西根町寺田字七時雨山１の１の国有林内（一部町有林）に所在する標高429.8ｍの暮坪山の山頂一帯にひろがる。麓の暮坪集落付近の標高は360ｍほどで、約50ｍの比高差がある。山頂は細長い尾根が南北に伸び、ほぼ中央を南北に横断するように防火帯が設けられている。竪穴住居跡は山頂全体に30基以上造られているとみられるが、防火帯のために一部不明瞭である。尾根の南半部には堀の痕跡が認められる。堀は尾根を東西に横切り、西側、南側斜面まで確認できるが東側においては現状では確認できなかった。堀に囲まれた部分には15基ほどの竪穴住居跡が密集している。この遺跡は戦前にすでに小田島禄郎氏が注目していた（『史跡名勝天然記念物調査報告』４、1924）。今回はこのうちの、堀のすぐ内側の小型の竪穴住居跡（７号竪穴住居跡）と、そこから南へ約40ｍの大型の竪穴住居跡（２号竪穴住居跡）の各１基の竪穴住居跡を発掘した。また、７号竪穴住居跡のすぐ西側の堀にもトレンチを入れた。

写真７　暮坪遺跡遠景



第９図　暮坪遺跡周辺地形図



第10図　暮坪遺跡全体図（室野秀文氏作図）

2号竪穴住居跡（第11図）（写真8）

2号竪穴住居跡は暮坪山の頂上に立地し、調査区域の南部に位置する。他の住居跡と同様、調査前段階で埋まりきらない窪地として確認された。また破壊はうけていなかったが、以前の調査の痕跡が一部、円形の窪地として確認された。

＜平面形＞方形。規模は約5.5×6.0m。主軸方向はN－44°－W。

＜堆積土＞6層に分層された。全体的に凝灰岩のブロックを含む暗褐色土の自然堆積である。また住居は、灰白色火山灰層を切って造られている。

＜壁面＞壁高は北東壁で65cm前後、北西壁で45cm前後、南東壁で30cm前後、南西壁で75cm前後を測りほぼ垂直に立ち上がる。

＜床面＞ほぼ平坦で比較的堅くしまっている。また、カマドの取り付けられている南東壁を除いた壁際に、幅15cm前後、深さ1～3cmの溝が巡る。

＜柱穴＞床面から5個検出された。そのうち3個は南東壁に接し、その中でカマドに極めて近接するものが1個確認された。ほとんどが検出面での長径30～40cm、深さ約45cmであり、カマドに近接するものは検出面での長径20cm、深さ約35cmであり、他の4個に比べるとやや小さめである。

＜炭化材・焼土＞床面、覆土より多量の焼土や炭化材が検出されていることから焼失家屋と推定される。床面の南西壁側と北西壁側の一面は、板状の炭化材で覆われていた。この炭化材は壁と直角にならんでおり、床板または腰板が焼けて炭になったものと思われる。またカヤと思われる炭化材も南西壁付近において多量に検出され、柱状の炭化材も、北西壁側と北東壁側において数本検出された。

＜出入口部＞本住居跡の南東壁側の東隅に、幅約1.2m間隔で柱穴が確認されたことから出入口部であると推定される。

＜出土遺物＞土師器片が28点出土し、すべて甕の破片と思われる。また鉄滓も数点出土した。

2号竪穴住居跡カマド（写真9）

＜位置＞住居跡南東壁の南寄り。主軸方向はN－44°－W。

＜構造＞掘り込み式。

＜全長＞約2m。

＜袖＞地山を削り出して造っていると思われ、一部凝灰岩を用いて補強している。残存状況は良好である。左右並行である。

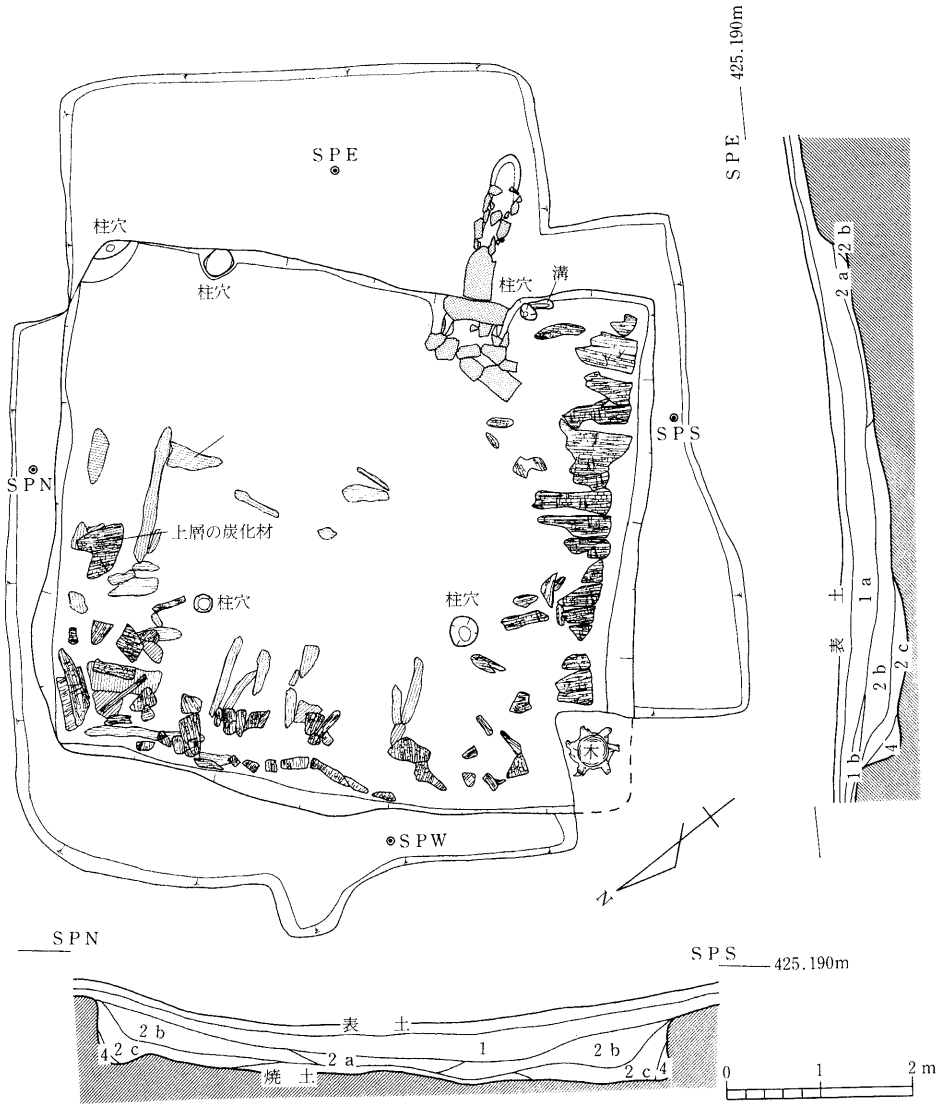
＜燃焼部＞中央に1つ支柱が存在する。天井石は一枚しか残っていないが、周囲に崩落した加工痕がある方形の凝灰岩が散在し、それらが組合せられ天井部を構成していたと思われる。

写真 8　暮坪遺跡 2 号竪穴住居跡（東から）

写真 9　暮坪遺跡 2 号竪穴住居跡カマド

底面はほぼ平坦で住居跡床面より５～８cmほど高く、全面加熱され焼土が広がっている。

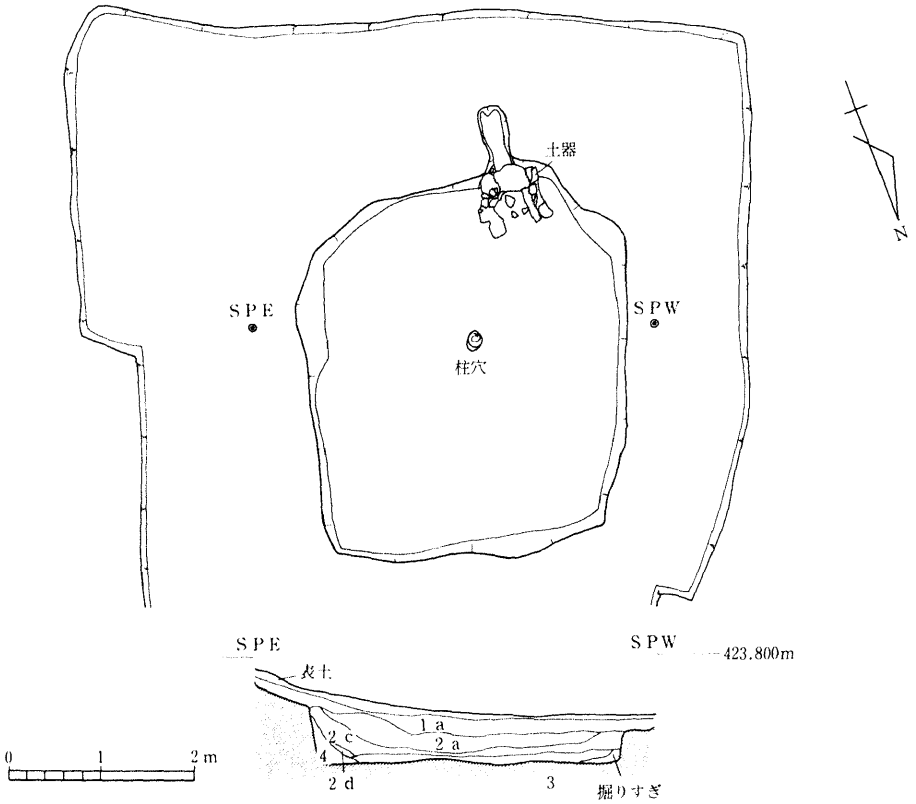
＜煙道部・煙出し部＞長さは約1.2ｍを測る。壁面には小さな不整方形の凝灰岩を立て並べてあ



表土．黒褐色（7.5YR 2/2）
1a．黒色（7.5YR 2/1）腐植堆積土、凝灰岩を含む
1b．暗褐色（7.5YR 3/4）凝灰岩の粒子を含む
2a．暗褐色（7.5YR 3/3）凝灰岩の粒子を含む
2b．暗褐色（7.5YR 3/4）凝灰岩の粒子を多く含む
2c．暗褐色（7.5YR 3/3）凝灰岩を少し含む
4．　暗褐色（7.5YR 3/4）層下部に鈍い黄橙色（10YR 7/4）のパミスをブロック状に含む

第11図　暮坪遺跡２号竪穴住居跡

るが、中央部には縦に半分に割った大型の甕をはりつけている。天井部は燃焼部に接続する部分に長方形の凝灰岩を使用している。そのほかは粘土をつき固めて構築した可能性がある。底面は住居跡壁際から煙出し部まで同じ高さで続いている。



表土．黒褐色（7.5YR 2/2）
1a．黒色（7.5YR 2/1）　腐植堆積土　凝灰岩を含む
2a．暗褐色（7.5YR 3/3）凝灰岩の粒子を含む
2c．暗褐色（7.5YR 3/3）凝灰岩を少し含む
2d．黒褐色（7.5YR 3/2）凝灰岩をブロック状に含む
3．　黒色（7.5YR 2/1）
4．　暗褐色（7.5YR 3/4）層下部に鈍い黄橙色（10YR 7/4）のパミスをブロック状に含む

第12図　暮坪遺跡7号竪穴住居跡

7号竪穴住居跡（第12図）（写真10）

7号竪穴住居跡は、調査区域の北西隅に位置し、2号竪穴住居跡からは南に約40m程離れている。尾根上にある防火帯の西側にあり、住居跡のすぐ西側は急な斜面になり、約8m下方には堀跡と土塁跡が確認された。攪乱等は受けておらず、残存状況は良かった。7号竪穴住居跡は他のものと同様に、調査の前段階から、完全に埋まりきらずに窪地となって地表から確認することができた。

＜平面形＞隅丸方形。規模は約3.0×3.4m。主軸方向はN－11°－E。

＜堆積土＞7層に分層できた。全体的に凝灰岩のブロックを含む暗褐色土の自然堆積である。住居は、灰白色火山灰層を切って造られている。

＜壁面＞壁高30～6cm。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁の南半分、北壁の中央付近、住居の南西隅付近でやや外傾する。

＜床面＞ほぼ平坦で、しまりが悪く、直径約3cm程度の礫を多く含んでいる。

＜柱穴＞床面のほぼ中央に1個検出された。長径24cm、短径16cm、深さ約44cmである。また、底面には石がすえられていた。

＜炭化材・焼土＞炭化材は3層の上面から丸太状のものが数本検出された。焼土はカマドの床面から、あまり広くない範囲で検出された。

＜出土遺物＞土師器片が床面、覆土中及び住居周辺から合計235点出土した。そのうち床面からは、ほぼ完形の土師器甕が1点、またカマド付近から土留めに使っていたと思われる土師器片が28点出土した。出土遺物の大多数は甕の破片と思われるが、坏の破片も数点出土した。また鉄滓も1点出土した。

7号竪穴住居跡カマド

＜位置＞住居跡南壁の西寄り。主軸方向はN－5°－E。

＜構造＞掘り込み式。

＜全長＞約1.4m。

＜袖＞凝灰岩の石組みで構築され一部粘土を用いて補強しており、残存状況は良好である。ほぼ左右並行である。

＜燃焼部＞中央に大小2つの支柱が存在する。天井部は煙道部付近にのみ凝灰岩の石組みが残存する。底面は住居跡床面より5cm前後くぼんでいる。

＜煙道部・煙出し部＞長さは約0.8mを測る。石は使用されていない。天井部は粘土をつき固めて構築された可能性がある。底面は住居跡壁際から煙出し部まで同じ高さで続いている。

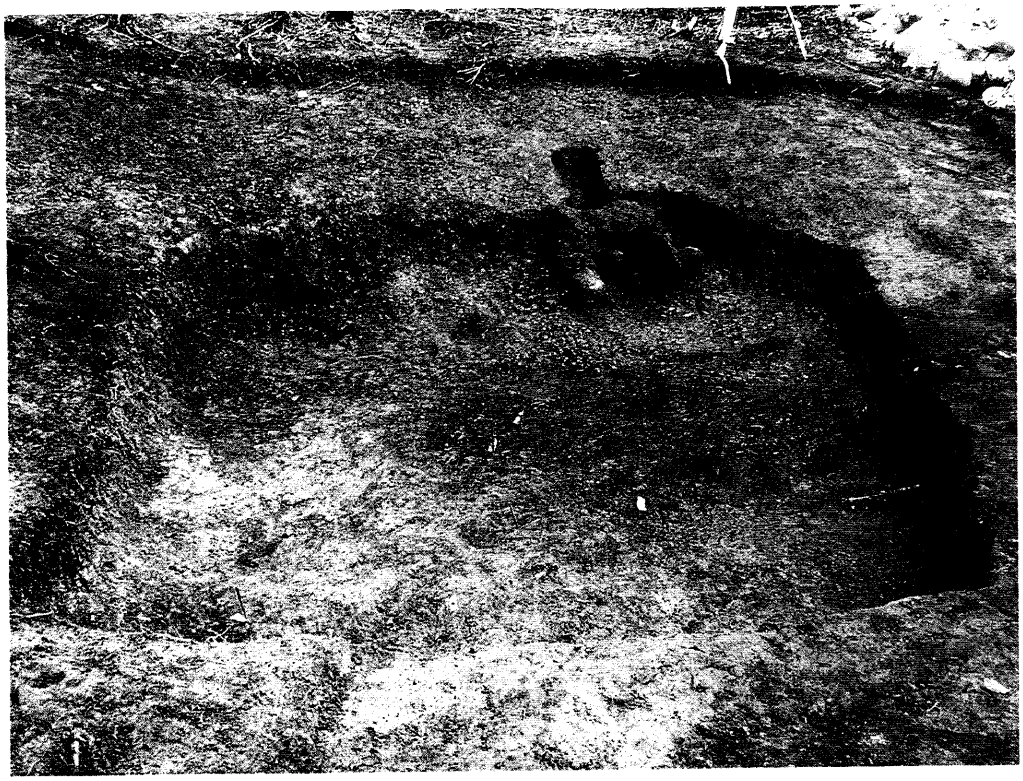


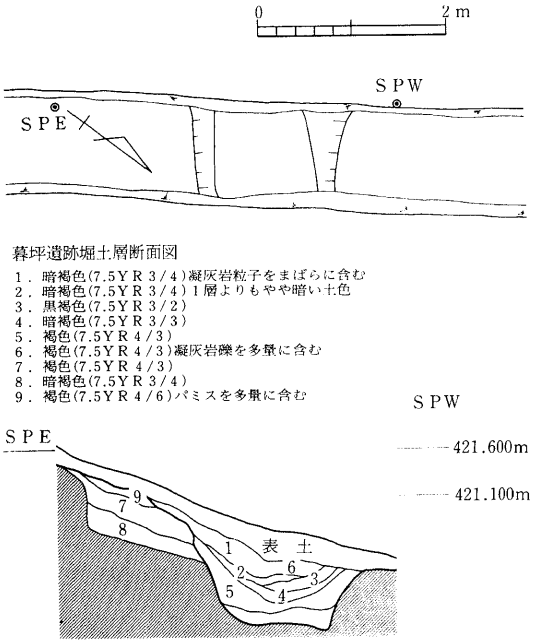
写真10　暮坪遺跡７号竪穴住居跡（北から）

堀・土塁（第13図）

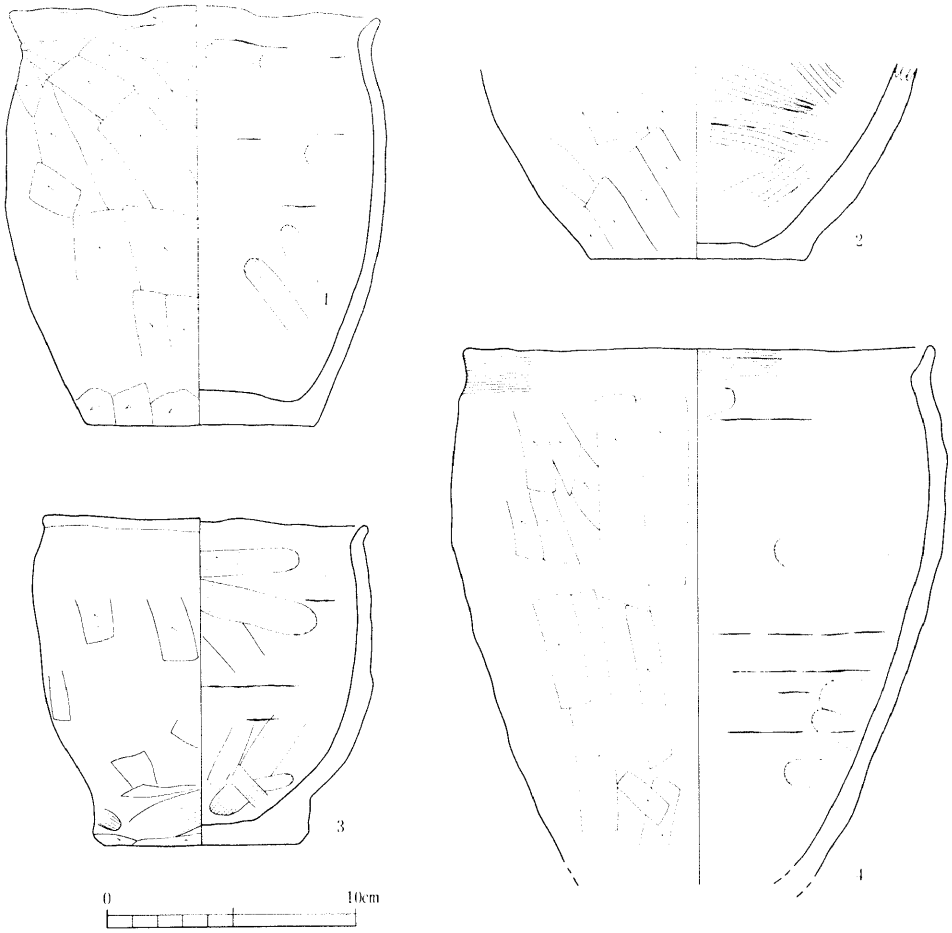
堀の性格を知るために７号竪穴住居跡の西側に位置する堀の一部にトレンチを入れた。その結果この土塁と堀は竪穴住居跡と時期的に同一であると考えられる。

＜形状＞底面１ｍ・上面1.8ｍ・深さ0.6～１ｍの逆台形状

＜層序＞６層に分層された。自然堆積と思われる。灰白色火山灰層を切って造られている。堀を造る際に生じた土を堀の内側に盛り上げて土塁を築いていたと思われる。



第13図　暮坪遺跡堀トレンチ



第14図　暮坪遺跡出土土器

写真11　暮坪遺跡出土土器　土師器甕

遺物

出土遺物のほとんどが土師器の甕である。ただし7号住居より土師器の坏も数片出土した。そのなかには内面黒色処理を受ける口縁部や、両面黒色処理を受ける高台部が含まれていた。

出土土器観察表（第14図）（写真11）

図版番号	器形	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	胎土 焼成 色調	出土状況 備　考
1	土師器 甕	15.1 9.2 15.3 17.1	上部の1/2を欠く。口縁部が短く外反。胴部がわずかに膨らむ。	非ロクロ整形。外面は縦方向の粗いヘラケズリ。内面はユビナデ。輪積み痕が残る。	やや粗く砂粒含む。 良好 にぶい黄橙色	7号住居跡ベルト内出土。
2	土師器 甕	— 8.8 — —	胴部から底部にかけての1/2が残存。胴部は器厚が厚いが底部は薄い。	非ロクロ整形。外面は縦方向のヘラケズリ。内面はヨコハケ整形。	やや粗く砂粒含む。 良好 浅黄橙色	7号住居跡北東付近3層出土。
3	土師器 甕	12.6 7.8 13.6 13.4	ほぼ完形。口縁部がわずかに外反。胴部は膨らまない。	非ロクロ整形。外面は胴部と底部側縁はヘラケズリ。胴部下はユビナデ。内面はユビナデ。	密だが砂粒含む。 良好 にぶい黄橙色	7号住居跡カマド出土。
4	土師器 甕	18.8 — 20.0 —	口縁部から胴部にかけての1/3が残存。口縁部がわずかに外反。胴部はわずかに膨らむ。	非ロクロ整形。外面は縦方向の粗いヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面はヨコハケ。輪積み痕がよく残る。	やや粗く砂粒含む。 良好 橙色	2号住居跡カマド煙道部出土。

法量の数値は上から、口径、底径、最大胴径、器高の順に記載する。

6．横田館遺跡

概要（第15図、第16図）（写真12）

横田館遺跡は岩手郡岩手町大字久保字横田に所在する。遺跡は、一方井盆地の東端部に位置し、一方井川と太田川の合流点に向かって突出する丘陵の先端部に営まれており、ふもとの横田集落からは30～40ｍほどの比高差がある。四重の土塁と堀で周囲が囲まれた内部には、各所に平坦面があり、竪穴住居跡が散在している。現状では竪穴住居跡は窪みとなって残っており、15基ほどが確認され、そのほとんどが周堤を有するようである。この遺跡は室野秀文氏により、注目されていたもので（『中世城郭研究』５号、1991）今回は、丘陵の西側斜面に位置し、土塁と堀のすぐ内側に隣接して存在する二基の竪穴住居跡の発掘調査を行なった。

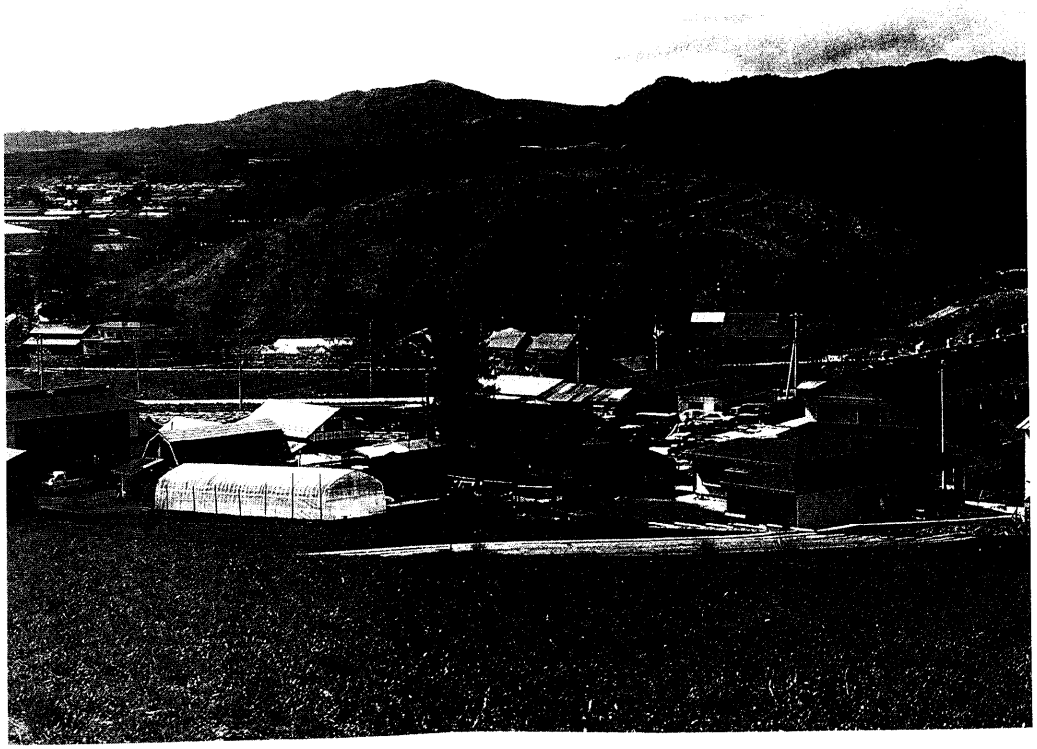
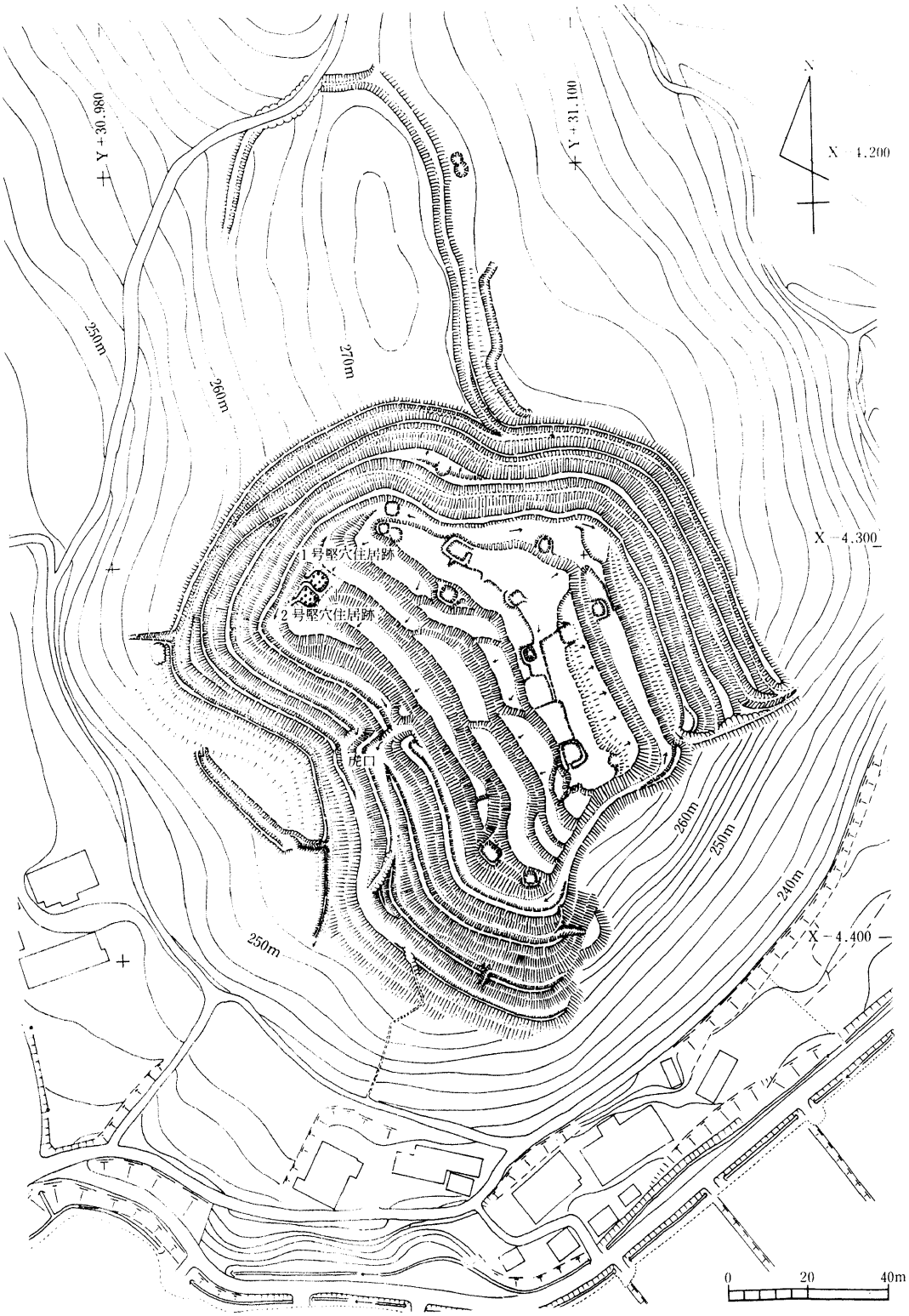
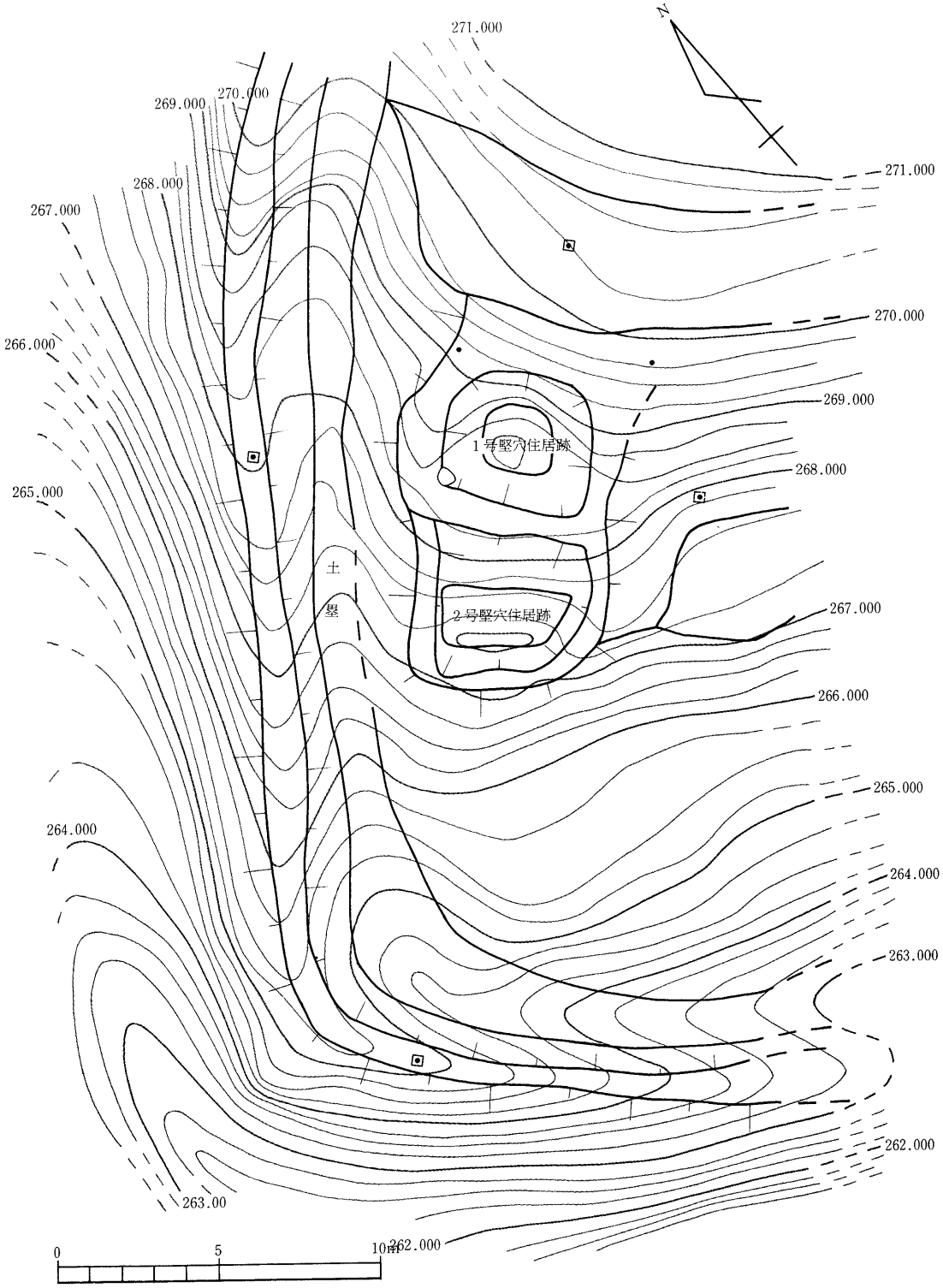


写真12　横田館全景（高橋昭治氏提供）



第15図　横田館遺跡全体図（室野秀文氏作図）



第16図　横田館遺跡調査周辺測量図（調査前）

1号竪穴住居跡（第17図、第18図）（写真13・14）

1号竪穴住居跡は調査区域の南西隅の斜面上に位置する。住居跡の西側約6ｍの場所に土塁と堀が巡っている。調査の前には窪地となって竪穴の存在が確認でき、住居跡の西側と東側には多少の盛り上がりが確認できた。攪乱などは受けていない。

＜平面形＞方形。規模は約4.0×4.0ｍ。主軸方向はＮ－6°－Ｅ

＜堆積土＞8層に分層された。全体的に凝灰岩を含み、壁面からの崩落土と自然堆積土からなる。土色は褐色土や暗褐色土が主体となる。

＜壁面＞壁高は北壁で約70cm、南壁で約10cmである。壁は僅かに外傾するもののほぼ垂直である。上部においては若干の崩落がみられる。

＜床面＞床面はほぼ平坦であり、しまっているが、よく踏み固められているという状況ではない。西壁の出入口付近には8～20cm程の河原石が散在している。

＜柱穴＞四方の隅と各辺の中央と竪穴中央の東西に各1個の計10個が検出された。柱穴は検出面から底にゆくにしたがってせまくなっている。規模は床面で直径20～40cm・2段目で10～20cm・底面で5～15cmである。深さは約60～90cmである。北西隅の柱穴では柱根が残っていた。

＜炭化物・焼土＞住居跡の西側中央部付近で少量検出された。

＜出入口部＞住居跡の西壁南隅に幅約1ｍ・長さ約1.5ｍのスロープ状になって南西に向かって伸びている。

＜遺物＞土器などは発見されなかった。

＜周堤＞住居跡の北西側と南東側に僅かな高まりとして検出された。周堤は住居を造ったときの土を盛り上げたものと思われる。

＜集石＞住居跡の西壁から約2ｍほど離れた場所に1ｍ四方の範囲で多量の石がまとめて積み上げられていた。石は河原石であり大きさは直径約8～16cm、重さ平均640ｇである。

2号竪穴住居跡（第17図、第18図）（写真13・15）

2号竪穴住居跡は調査区域の南西隅の斜面上の1号竪穴住居跡の南1ｍの位置にある。調査前には窪地となって竪穴の存在が確認できた。

＜平面形＞長方形。規模は約4.7×3.0ｍ。主軸方向はＮ－2°－Ｗ

＜堆積土＞8層に分層された。全体的に凝灰岩のブロックを含み崩落土と自然堆積土からなる。土色は褐色土が主体となる。

＜壁面＞壁高は北壁で約1ｍ、南壁で約25cmである。壁はほぼ垂直であるが上部では崩落がみられる。

<床面>ほぼ平坦であるが住居跡の中央部でやや盛り上がっている。床面はしまっているが、踏みかためられたような状況はない。西壁の中程から北西隅の柱穴までの壁際に長さ約70cm、幅約10cm、深さ約10cmの溝がある。この溝にあたるところに壁板とみられるものが立っていた痕跡が検出された。

<柱穴>8個が検出された。竪穴住居跡中央部の東西に位置するものを除くと残り全てが壁際に位置する。直径で20～40cm、底径は10～20cmである。北壁の中央に位置する柱穴には長さ12cm、直径5cmの加工痕が残っている柱根が出土した。

<出入口部>住居跡の南壁西隅に幅約0.6～0.9m・長さ2.2mのスロープ状になって南西に向かって伸びている。スロープの中程の西壁際に直径約15cmのピットが検出された。

<遺物>一辺23cm程で厚さ10cm程の隅丸方形をした石が出土した。

<周提>住居跡の西側に帯状のわずかな高まりとして確認された。住居を造った際に出た土を積み上げて造られたと思われる。

写真13　横田館遺跡1・2号竪穴住居跡（北から）

写真14　横田館遺跡１号竪穴住居跡（北から）

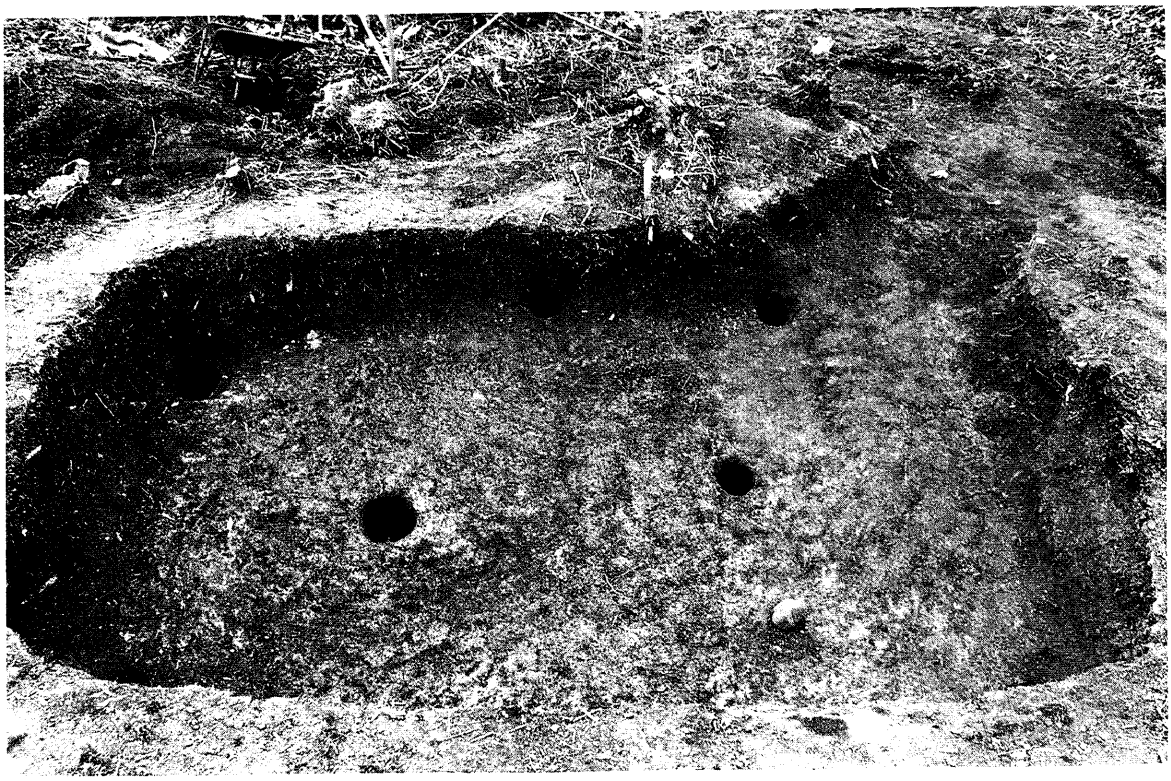
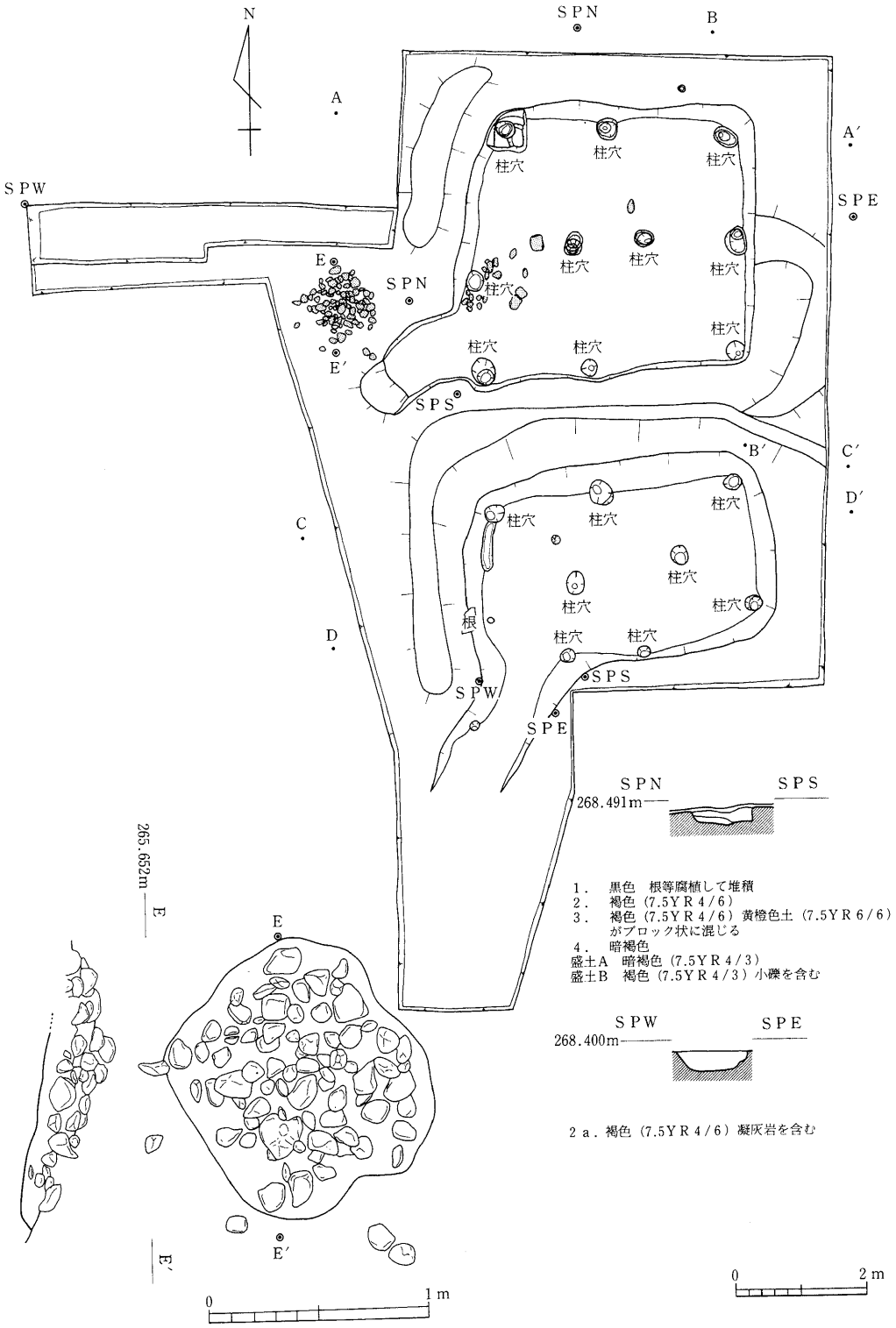
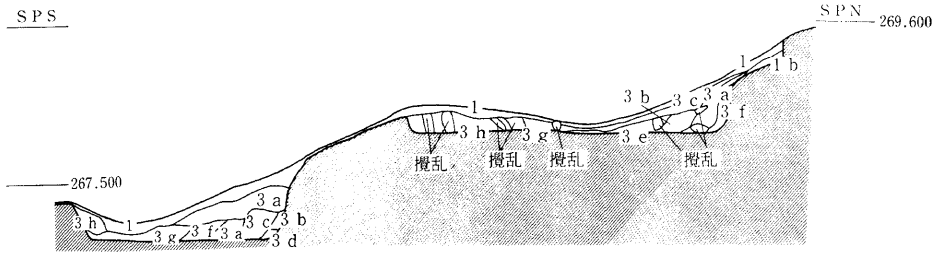
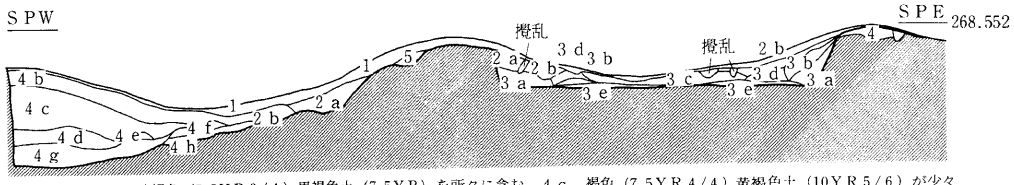


写真15　横田館遺跡２号竪穴住居跡（北から）

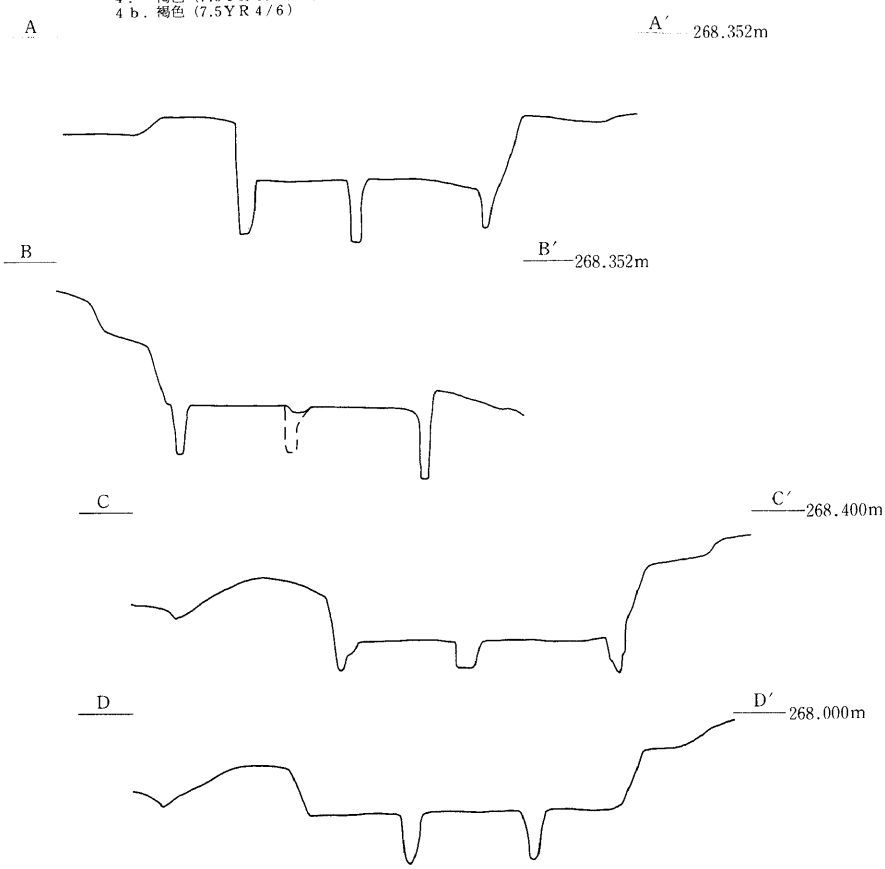


第17図　横田館１・２号竪穴住居跡および集石

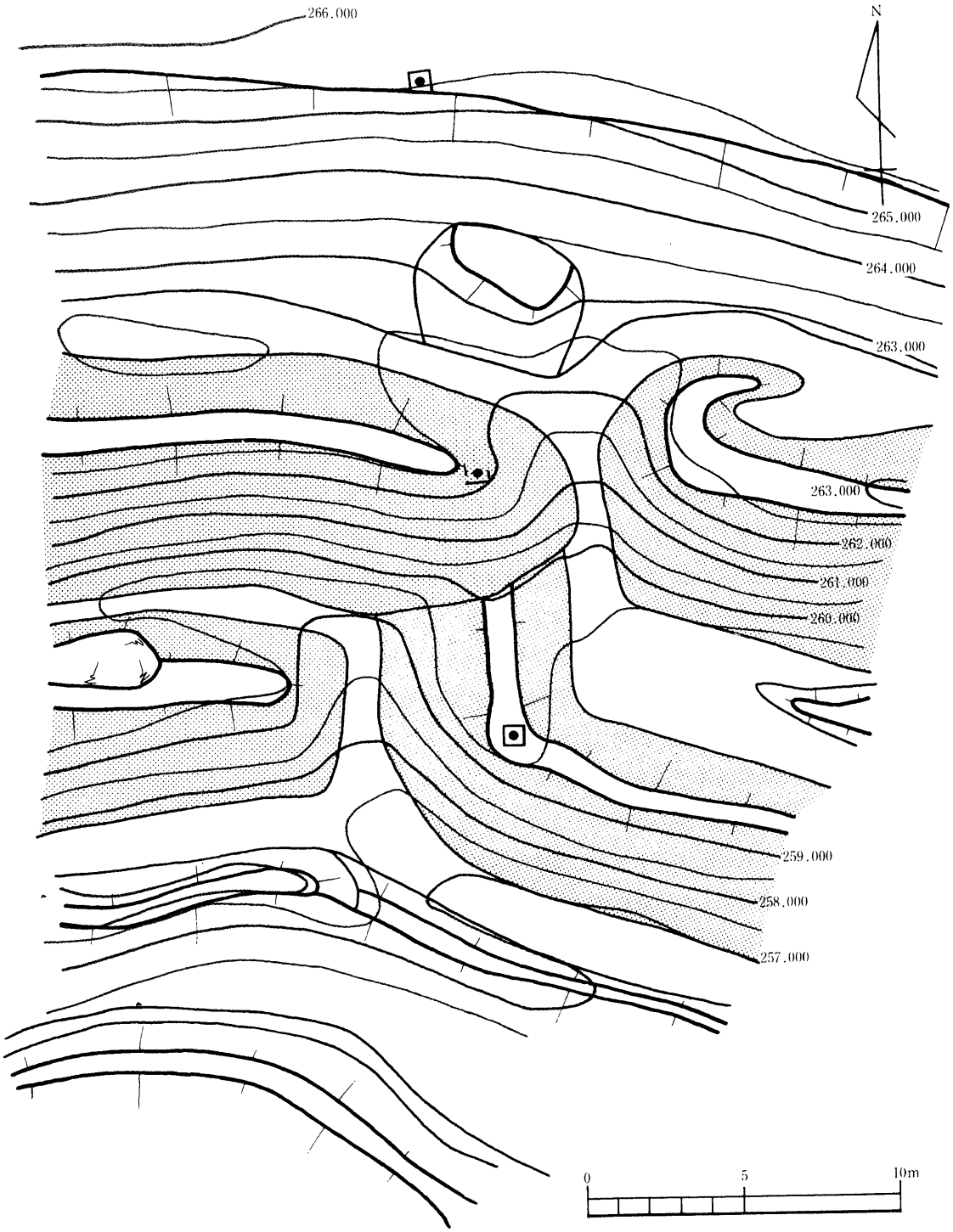




1．　暗褐色（7.5YR3/4）黒褐色土（7.5YR）を所々に含む
2a．褐色（7.5YR4/6）
2b．褐色（7.5YR4/4）
3a．明褐色（7.5YR5/6）凝灰岩を含む
3b．褐色（7.5YR4/6）凝灰岩、有機物を含む
3c．褐色（7.5YR4/4）凝灰岩、有機物を含む
3d．暗褐色（7.5YR3/4）凝灰岩、有機物を含む
3e．暗褐色（10YR3/4）凝灰岩、有機物を含む
4．　褐色（7.5YR4/4）凝灰岩を含む
4b．褐色（7.5YR4/6）
4c．褐色（7.5YR4/4）黄褐色土（10YR5/6）が少々混じり小さな凝灰岩を少し含む
4d．黄褐色土（10YR5/6）が混じる
4e．黄褐色土（10YR5/6）が混じる
4f．褐色（7.5YR4/6）
4g．黄褐色（10YR5/6）褐色土（7.5YR4/4）が混じり、小さな凝灰岩を含む
4h．褐色（10YR4/6）凝灰岩がブロック状に含む
5．　黒褐色（7.5YR3/2）



第18図　横田館遺跡1・2号竪穴住居跡および土塁断面図



第19図　横田館遺跡虎口

土塁（第17図、第18図）

横田館遺跡は数重の土塁によって囲まれているが、土塁の内側の裾は通路状になっていて、住居の出入口と接している。今回の調査では１号竪穴住居跡の西側約６ｍに位置する土塁の中程までトレンチを入れた。

＜形状＞台形状

＜規模＞高さ1.3ｍ、幅約４ｍ。

＜層序＞９層に分層された。遺構の積み土と自然堆積土からなり、土色は褐色や黄褐色を呈する。堀を造った際に出た土を盛り上げて土塁を築いたと考えられる。

虎口（第19図）

横田館遺跡の西側斜面に土塁と堀によって造られた虎口と考えられる遺構が測量調査で確認された。ほぼ同一の形状の虎口が２つ近接して存在するが、そのうちの１つは、そこから郭内に入ることができない偽虎口である。

７．まとめ

子飼沢山遺跡、暮坪遺跡はともに集落は山頂の幅の狭い尾根線上に営まれており、その周囲は深い沢で囲まれており容易にたどり着き難い様相を示している。しかも暮坪遺跡の場合は集落の周囲には堀がめぐっていたことがわかった。本来は堀の外側には土手があったであろう。これらの点から、両遺跡が防御に意を用いた集落であることが想定される。年代は両遺跡ともに10世紀後半から11世紀前半ころと考えられる。

横田館遺跡は内部が100メートルに70メートルほどの広さで、周囲を三重、場所によっては四重に土塁がめぐる単郭多重塁型式の構造である。郭内には階段状に帯状の４～５段の細長い平坦面があり、平坦面と平坦面の間は急傾斜になっている。また郭内には15または16ケ所の竪穴住居跡がくぼみとなって観察できる。発掘調査を実施した竪穴住居跡の平面は長方形で隅の部分に出入り口がある。壁面沿いと中央部に柱穴がある。床面はあまり固くはなく、炉や竈はなかった。土器などの遺物は発見されなかった。なお一軒の住居の出入口の外側に、こぶし大の石の集積が認められた。発掘調査は行なっていないが、郭内の平坦面の要所要所にはあるいは堀立柱の建物跡があるかもしれない。土塁が切れており出入口となる部分（虎口）は西南部に２つ、東南部に１つあるが、西南部の１つのものは進入しても郭内には入れない偽虎口である。住居の内部には炉や竈がなく、床面も固く叩き締められているとはいえない。出土品がないこととも考え合わせると、長期にわたる生活の場とは考えられない。近くの住民が緊急時に避難また立てこもりを目的としたものと考えられる。年代は中世前半期前後であろうが、平泉藤原

氏の福島県国見町の厚樫山防塁線は多重塁型式であり、これを考慮すると横田館も平安時代末期までさかのぼる可能性も皆無ではない。

ところで学界において高地性集落は環濠集落とともに弥生時代を特徴ずける遺跡とされている。弥生時代の西日本は古代国家形成の初期段階にあたっており、各地域あるいは地域内における集団間の抗争が盛んであった。北日本の平安時代に環濠集落、高地性集落が出現するのも、やはり集団間の抗争が高揚したことを示す可能性がある。ただしかつて西日本の高地性集落でも、焼畑農業の集落の可能性が示唆されたように、北日本の高地性集落も焼畑や狩猟などを生業とする山地民の集落である可能性も考える必要がある。岩手郡域では高地性集落は子飼沢山遺跡や暮坪遺跡よりもなお高地にも存在するらしい。これらの時期などは現段階ではまったくわからないが、場合によっては平安時代のある時期に人々の生活基盤が平地から山地に移行したこともあるかもしれない。しかし平安時代の東北北部には高地性集落だけではなく環濠集落（青森県高屋敷館遺跡）も存在することからすると、東北北部の平安時代高地性集落はやはり軍事的な意味のある防御的集落である可能性が高いと考える。ただし高地性集落の存在基盤として山の生活があった可能性は考慮しておこう。いずれにせよ東北北部に軍事的意味のある集落が存在したのであれば、このような集落を生み出した歴史的背景を探らねばならない。

文献史料には奈良・平安時代の蝦夷の集団間の抗争が記されている。平安中期には奥地の集団間でも武力抗争が激化し、北海道の一部までも巻き込んでいる。11、12世紀にも前九年の合戦では安倍頼時と安倍富忠の対立があり、後三年の合戦は清原氏の内部対立にはじまり、平泉藤原氏の配下ながら、文治五年奥州合戦で平泉藤原氏本流とは別の行動をとった河田次郎、大河兼任らが存在したように、安倍、清原、平泉藤原氏の内部ではしばしば武力抗争をも含む内部対立があった。大河兼任は外浜と糠部の間の多宇末井の梯を城郭として立籠ったとの風聞があったという。安倍、清原、平泉藤原氏の一族や勢力下の大小の豪族の拠点やその支配地域には、依然として防禦性集落、逃込みや見張りの機能を持つ集落、さらには立て籠りのための城が存在したと考えられ、その系譜をひく集落は中世にもなお作られ続けたと考えられる。高地性集落や環濠集落にはこのような背景があったと考えられる。

以上のような点とは別に、東北北部の高地性集落の延長上のものとして、北海道のチャシを理解できないかどうかという問題もある。北海道のチャシの系統については、北アジアの系統とする説、北海道における自生説などがあるが確定をみていない。青森県六ケ所村の鷹架沼南館遺跡や秋田県鹿角市の太田谷地館遺跡などは沼や平野に突き出た半島状の地形の突端部に位置する古代の集落で、その基部は堀で断ち切られており、チャシ、とくに丘先式チャシとの類似が著しい。また北海道乙部町小茂内遺跡はチャシ的な遺跡ながら擦文土器や竪穴住居が検出されており、北海道におけるチャシ的なもののうちの年代のさかのぼる例で、時期も平安時代

におさまり、東北北部の平安時代高地性集落と同じものとも見られるのである。

筆者は古代の蝦夷社会を部族制社会と考えているが、北海道は鎌倉時代以後も、政府の直接支配の外にあり、和人の政治的、経済的な影響のもとにではあるが、なお一層部族制社会が展開する余地があった。アイヌ民族の英雄叙事詩ユーカラは、そのような社会の姿を背景にしている。したがって北海道では防禦性集落や見張り、逃込みの集落も必要でありつづけたであろう。チャシの系譜については種々の説があるが、少なくともその根源のひとつに東北北部の平安時代高地性集落や環濠集落を考えることも可能なのではないだろうか。

ところでこれからの古代史は北日本地域の歴史をも組み込んだ歴史でなけらばならず、それなくしては真の意味での日本史の構築は不可能であろう。そしてこの種の遺跡の解明は北日本の古代史研究の鍵になる可能性がある。しかしこれまでは東北北部に平安時代を中心とする時期の高地性集落などが存在するということ自体、学界の常識とはなっていなかった。それはひとつには遺跡の所在が山間部に偏しており、開発がらみの発掘調査の対象となることが少ないことにもよる。したがってこのような集落がいつごろからいつごろまで作られたのか、このような集落の規模は一般的にどの程度のものなのか、このような集落は東北北部にはどのくらいあるのかなど、基本的な研究がまだまだ必要なのである。この種の遺跡に対する研究は今後とも継続する必要がある。

この種の遺跡の調査研究を通して、これまで全く知られていなかった北東北の新しい古代史が浮かび上がってくる可能性が開けたということもできるのであり、今回報告する成果が、古代蝦夷の研究に何らかの寄与ができることを期待するものである。

なお三遺跡の発掘調査にあたっては多くの方々のご援助、ご協力をいただいた。文部省科学研究費補助金の執行に共同研究者として適切なご助言をいただいた甘粕健、村越潔、榎森進、熊田亮介、辻秀人、樋口知志の諸氏、三遺跡の発掘調査にあたり細部にいたるまでご協力いただいた高橋昭治、本堂寿一、高橋與右衛門、近谷秀雄、八木光則、室野秀文、菅原修、相原康二、高橋信雄の諸氏、横田館遺跡の発掘を快諾していただいた土地所有者の十和田忠次郎氏、そして調査にあたって諸般の援助を惜しまれなかった岩手県教育委員会文化課、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、盛岡市教育委員会文化課、岩手町と西根町の町長、教育長をはじめとする当局の方々、三遺跡の地元の方々には厚く謝意を表したい。

（付記　本稿は「はじめに」「まとめ」を工藤雅樹が執筆し、他の部分は福島大学行政社会学部考古学研究室の安彦美由紀、稲村圭一、遠藤千映美、大波紀子、小原広幸、今野公顕、斎藤仁、酒井秀治、白川輝、丹治篤嘉の原稿をもとに工藤雅樹が編集した。なお参考文献は紙数の関係で省略させていただく。）